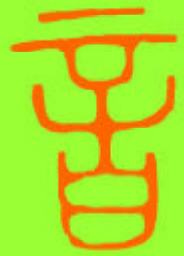


京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター
所報

第1号 2001年3月

ISSN 1346-4590



Newsletter
of the
Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts

No. 1 March 2001

京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター
所報

第1号 2001年3月
ISSN 1346-4590

目次 CONTENTS

発刊のことば	廣瀬 量平	3
On the Publication of this Newsletter	HIROSE Ryohei	
所長対談 日本音楽研究家 吉川英史氏にきく		4
The Director Interviews Japanese Music Researcher KIKAWA Eishi		
Summary in English		15
エッセイ		
Essays		
日本伝統音楽と私	廣瀬 量平	16
What Japanese Traditional Music Means to Me	HIROSE Ryohei	
あれや、これや	久保田 敏子	19
This and That	KUBOTA Satoko	
番組情報から学術情報へ... ..	長廣 比登志	21
Turning Records of Broadcasts into Data for Research	NAGAIHIRO Hitoshi	
現在・将来の研究テーマについて	田井 竜一	23
My Present and Future Research Topics	TAI Ryuichi	
楽と科学に志して道づくりをしたい	高橋 美都	24
Laying a Path for Music as Science	TAKAHASHI Mito	
来日からの20年を振り返って	スティーヴン・G・ネルソン	26
Looking Back on My First Twenty Years in Japan	STEVEN G. NELSON	
センターニュース		28
Centre News		
日本伝統音楽研究センター 概要 2000		38
Guide to the Research Centre for Japanese Traditional Music, 2000		40
編集後記		43
Editorial		

発刊のことば

この研究センターが出来、活動計画が次第に明らかになるにつれて、誰からともなく「所報」が必要との声が上がった。

正規の研究成果は論文として「紀要」に掲載される。しかしそれとは別にこのセンターの中で起きていること、考えられていること、所員の仕事や活動やその周辺のこと、それにセンターにかかわりある内外の情報などをお互い知り合うと同時に、広く所外の方々にも知っていただくことが必要なことは言うまでもない。

そういう意味でこれは「所内報」でもなく、「所外への広報」だけでもない。つまり「所報」というわけだが、このささやかな出版物についても、所内では何度も真剣な議論が持たれた。たとえば、編集方針、掲載内容、それに所報の大きさ、体裁、つまり縦書きか横書きか、それに紙質、重さ、発送の方法などなど。こういうところにも創成期特有の熱気があふれていた。

編集委員を中心に所員全員が歴大な力をこの小さな「所報」に結集して、ともかく初号創刊に漕ぎつけた。

先程創成期と書いたが、この一年足らずの間は、センターの方向づけ、存在意義、研究や活動の方針などをめぐって、模索の連続だった。実務についても、はじめてのことが多く、夜おそくまで全力投球の日が続き、あっという間に月日が過ぎた。もし、この一日一日のことを克明に記録したら、後世のために貴重な資料となったかもしれないと思いつつ、そのための人員も時間もなかったため、果たせなかったのは残念であった。

何事も無からはじめることの苦難はそのままパイオニアの喜びなのかもしれない。願わくば、このセンターの存在と活動が、日本伝統音楽を核としてフロンティアを拓き、その結果としての新しい展望が、少しでも多く、また広く世に貢献出来ることを願い、この「所報」もそのためのものでありたいと思っている。

日本伝統音楽研究センター所長
廣瀬 量平

所長対談

日本音楽研究家 吉川英史氏にきく

日時：2000年10月22日（日）

13:00～15:00

場所：日本出版クラブ会館（東京）

【おことわり】

吉川英史先生は、既に全ての公職から完全にしりぞかれておられますが、今回特別のお計らいにより、ホームページへの掲載をご承諾いただきました。
 (PDF版に際しての注記)

聞き手 廣瀬 量平
 進行 長廣 比登志
 記録 高橋 美都

長廣 お話に入る前に、センターのこれまでのいきさつを所長からお話ください。

廣瀬 西暦2000年の今年4月、大学創立120周年記念の年にあわせて、建都1200年を経た京都の市立芸術大学に日本伝統音楽研究センターが創立されました。大学付属ではなくて、美術学部、音楽学部、伝統音楽研究センターと並立の組織になりました。

歴代の京都市長は交響楽団やコンサートホールをつくってきたのですが、この次は「日本伝統音楽だ」と研究センター設立を提案したところ、議会でも賛同をいただき、3年前に調査予算がついて、困難だと思われた事業が、実現したわけです。日本伝統音楽と申しますと、もちろん関連するアジアも入ってきますが、とりあえずは、日本伝統音楽、いわゆる邦楽だけでなく幅広く日本の音楽を考えたいわけです。

センターは8階建ての建物の6階から8階までで、研究室やセミナーなどができる設備のほか、常温常湿の楽器庫や貴重資料室も備えております。それに人材も

吉川 [概要の草稿を手にして]この人々の名前をみて、これは研究センターを是非実現しようと思われたのでしょうか。

廣瀬 いえ、私は3年前の1997年、実質的にセンターの準備に関わり始め、1999年の9月に正式に準備室長に任命されました。その後でようやく研究員の人選に入りましたので、それまでは動きたくても動けなかったのです。当初は10人以上の規模でと思っておりましたが、6人でのスタートとなりました。

長廣 通常は同じ京都にある国立国際日本文化研究センターのように、開所前に辞令が出て、集まった人々が討論して建物ができるのですが

廣瀬 ここは大学創立120周年にあわせて開設するというので、とにかく建物が先にできたわけです。

吉川 いい建物ができ、いい人々が集まり、本当によかったですね。

長廣 まだ、センターとしての方向性も固まっておりませんが、今日は吉川先生に長年のご研究生生活のなかでのお話を賜りたいということでございます。

先生の志を継ぐ

廣瀬 開所にあたって、我々としてはこの世界の草分けでいらっしゃる先生に是非お話を承りたかったのです。

吉川 いや、私は草分けではなくて、さらに先輩がたくさんいらっしゃいます。

廣瀬 それはそうですが、我々は先生がなさってきたことをずっと目標にして、その後を継がなければいけないと思ってきたわけです。私は作曲家ですが、先生のような方がいらっしゃったので、日本の作曲が豊かになったということもございます。伝統音楽を大事にするだけでなく、伝統音楽を土壌にしてみた、新しい音楽がたくさんできてくるわけで、先生はお気づきにならないかもしれませんが、大変なお仕事をされてきたわけです。我々は次の世代にそれを受け継いでいかなければならないのですが、先生の歩んで来られた道はかけがえのないお手本です。

日本伝統音楽研究センター、第一回目の所報には、ぜひ吉川先生にお話を伺い、先生のお言葉を、どうしてもこのセンターの歴史に記録しておきたいと考えたわけです。もちろん、これからもお力になっていただきたいと思います。

先生は東京芸術大学邦楽科に深くかわられたり、その他にもたくさんいろいろなことをなさってこられました。その話をお聞きしながら、やっぱり日本の音楽を研究し、あわせて興隆させることが、どれだけ大事なかなということを知っていただくために、この機会を作りました。この際これはぜひ言うておかななくてはと思われることをおっしゃってください。そういうお言葉

をいただきたいのです。

吉川 なかなかその力がないですけれども。まあ今年の設定はちょうどいい機会でしたね。これがあまり早くても、今おっしゃっていることが、なかなかかなわないのです。まあ、ある意味では遅すぎたという人もいると思います。本当にいい時に、こういうことが実現できて、結構だと思います。だから、創刊号に、私一人では不足で、大勢の方にお揃いいただいて、座談会的に、みんなでああだこうだと言ったほうが、間違いのないものが出来上がると思います。

何かことをやろうとすると有力な人が独走する傾向があります。会議などでも、そういう人が勢いよくやってくれないと後の人がついていけませんでしょう。けれど、どんな立派な人であっても独走する人が引っかけ回しては穏やかでないですし、みんなでひっぱりあうというか、うまくいくように努力することが望ましいですね。有力な人だけが独走してはいけないと思いますね。

日本音楽との出会い

廣瀬 先生は、伝統音楽を取り巻く渦の中で、生きてこられました。大事にしようという人と「日本音楽なんて古い！これからは西洋音楽でやるべきだ」と反対する人々がいて、日本音楽の中からもきっと、いろいろあったと思いますが、文字通り机の上で論じているだけでなく、体で実行してこられましたね。先生の生きてこられたことをお話になるだけで、そこに先生の思想が現れると思うのです。昔話でも結構ですから、どう



ぞお話ください。

先生は広島県の福山のお生まれでいらっしゃいますね。

吉川 そうそう、福山というのは、箏が盛んなところですね。お嫁にいくお嬢さんたちは、まず、箏を学び、その上手な人をもらったわけですよ。箏の下地がないと昔は、嫁ぐ資格がないとされて、習うことが勤めであり、福山あたりの風土として伝統として箏が盛んです。私の生家でも嫁がきたその晩に箏を弾かせていました。資格試験みたいなものですね。

廣瀬 先生も、その箏の音の響くなかで育たれたわけですね。あそこは宮城道雄先生の「春の海」が作曲された場所ですか？

吉川 はい、宮城先生の「春の海」はもう少し南の鞆の浦が舞台なんです。あの辺を目ではなく感じられて、考えられたのでしょうか。

廣瀬 同じエリアですね。

音楽美学への志向

廣瀬 ところで、後年、東京大学にいらして、美学をご専攻されたわけですね。

吉川 美学ですが、私は、その当時、日

本と西洋というふうにもいろいろのことを考えていました。まあ日本人なのだから日本音楽のことは知らなくてはおかしいと思いました。僕が成長した時代は、ちょうど西洋音楽が盛んになり、みながいろいろ西洋音楽のことをいう時代でしたが。そして、ちょうどありがたいことに運よく、田邊尚雄¹先生という方がおられて、それが、僕が東大に入った時から、日本音楽の講義をされたわけですよ。その前はだいたい西洋音楽の話ばかりだったのですが、日本でやるのだから、日本のことをやらなくてはおかしいと思いました。日本中心という言い過ぎですが、日本の音楽の話もなきやいけないと思ってはいたのですが、当時の先生は日本音楽のことはなさいませんでした。そのことに別に不平はありませんでした。ベートーベンのことを研究された田村寛貞²先生の話はおもしろかったですね。

廣瀬 大西克礼³さんの話も哲学的なお話だったわけですね。

吉川 そうです。僕が入学するころから、「わび・さび」などに話が移行する時代でした。それで、日本音楽以外に日本の美学という方向性がみえて

廣瀬 もともとは、ドイツのカント系の美学者であった大西先生が「わび・さび」の方に变化されたのですね。

吉川 そのころ、講義として聞いたわけだけでなく、まあ助手のような立場で、先生の考えには触れていました。「あはれ」などということをおっしゃいましたね。

廣瀬 先生は卒業論文は西洋音楽でお書きになったのですね。

吉川 卒業論文は、美術の方のやり方

を音楽に適用する方法を主任教授の大西先生や周辺の人々が採用されていたので、それに学びました。

廣瀬 日本音楽のことは、それではご卒業なさってから

吉川 はいそうです。卒業してからが主なのですが、私は日本にいて、もちろん西洋音楽の研究が盛んになるのはいいけれど、ぜんぜん日本の音楽のことをやらないのは不満でした。日本のことをやらなさ過ぎるという気がしていました。

廣瀬 明治天皇の侍医で東大の医学部を作ったベルツ⁴さんというドイツ人は、学生に日本のことを尋ねると「恥ずかしいから聞かないでくれ」という態度で、なんで自分の国のことをこんなに恥じるんだと日記に書いていますね。

先生はその後はどういう道を歩まれたのですか？

吉川 日本のことを考えた美学、日本の音楽に関することがあれば大変興味を持ちましたね。

恩師と研究の間

廣瀬 そのころは、日中戦争が始まり、太平洋戦争の前ですが、東京音楽学校には

吉川 戦争中は東京音楽学校にはまだ勤めておりませんでした。そのころは学生というか正規の学生ではない、聴講生のようなものでしょうか。専科生と言いました、本科生ではありませんでした。

あのころ兼常清佐⁵さんが、なんとなく日本音楽のことを茶化すようなことを言うので、あまり感心しませんでした。

廣瀬 純正調オルガンを作られた田中



吉川 英史(きっかわ・えいし)

邦楽研究家。明治42年(1909)2月13日、広島県神辺町生まれ。

1933年、東京帝国大学文学部美学美術史科卒。武蔵野音楽大学・東京芸術大学教授。東京大学・お茶の水女子大学・NHK邦楽技能者育成会・正派音楽院ほか講師。NHKの邦楽解説を長年担当。『季刊邦楽』主幹。(社)東洋音楽学会会長・(社)義太夫協会会長・日本琵琶楽協会会長・(財)宮城道雄記念館理事長・同館長・文化庁芸術祭執行委員会委員長などを歴任。

〔賞歴〕NHK放送文化賞(1972年)・紫綬褒章(同)・勲三等瑞宝章(1979年)・文化功労者(1993年)・広島県神辺町名誉町民(1994年)

〔主著〕『日本音楽の性格』(わんや書店、1948年/音楽之友社、1979年/独訳:ペーレンライター社、1984年)

『この人なり宮城道雄伝』(新潮社、1962年/邦楽社、1979年)

『日本音楽の歴史』(創元社、1965年)

『邦楽と人生』(創元社、1969年)

『日本音楽の美的研究』(音楽之友社、1984年)

『日本音楽文化史』(編著、創元社、1989年)

正平⁶先生はおられましたか？

吉川 あまりご縁は深くありませんでしたが、時々おいでになり、お顔も拝見しましたが、そのお弟子さんが活躍されていました。田村寛貞先生には可愛がっていただきました。

廣瀬 田邊尚雄先生も東京音楽学校でも教えておられましたか？

吉川 田邊先生は東大よりも先に東京音楽学校で教えておられました。田邊先生が東大では最初に日本音楽の講義をされました。学校で講義を聞いたのはそのころです。

廣瀬 私も田邊先生の晩年に、東京芸術大学での講義を聞きました。

吉川 私は、福岡にいたときの中学・高校時代に田邊先生の講演やお話を伺いました。

廣瀬 そのころの研究仲間は、日本音楽の研究者も西洋音楽の研究者もいっしょでしたか？

吉川 西洋音楽の研究者で、日本音楽のことをやる人はあまりおられませんでした。頭に残っているのは辻莊⁷さんです。あの方や野村良雄⁸さんや私などが5～6人でグループを作り、毎月とか一月おきに研究会を開いていました。

少人数で、実演を交えたりして、辻さんのいらした立教大学などで、野村さんや岸辺成雄⁹さんなどと、お互いの発表を聞きましたね。

邦楽科設置の周辺

廣瀬 それで、戦争が終わって、邦楽科を作るような運動が起きてきたのだと思います。

吉川 そのころ、別に私は指導者というわけではなかったのですが、運動をやった主な役ではありましたね。

廣瀬 そこをいちばんお伺いしたいのですが

吉川 やはり私は、どうして日本人が日本のことを関心をもってやらないのだろうと思っていました。たしか、NHKの何かの場でしたが、野村良雄さんと同席して、多少考えてくださっていたようですが、日本のことになると、一番熱のこもるのが私で、そのころ岸辺さんなども集まったと思いますが、実際には動く人はあまりいませんでした。

廣瀬 日本音楽研究所というのを設立なさったのですか？

吉川 研究所ですか？そういう話はありませんね。NHKのほうでお考えになっていたのではなかったでしょうか。

廣瀬 小宮豊隆¹⁰先生とはどういうご関係だったのですか？

吉川 小宮先生とは東京音楽学校の校長時代に、個人的なおつきあいがありました。小宮先生はあまり日本のことにはこだわられませんでした。

廣瀬 小宮先生は夏目漱石門下

吉川 もう少し広い意味で日本のことを考えたらという思いを持ってらしたと思います。

廣瀬 邦楽科を作ろうという具体的な話はどこで出たんですか？一番最初は

吉川 それは、たぶん私が言い出したんだと思います。文部省あたりで。そういう詳しい人や主になって引き回そうという人はあまりいませんでした。岸辺さんも反対はされませんでした。運動には携われませんでしたね。結局、私が主にそういうことをやりました。たとえば、応援団的な人、平井澄子¹¹さんあたりは、運動として熱心にされてましたね。

いっしょに代議士などの会合にいたり

廣瀬 東京音楽学校は音楽取調掛の時代には少しはお箏などもされていたのですよね。伊沢修二¹²のころのうんと昔は

吉川 それはまあ、ある意味では研究はしていたんですね。日本音楽をやるべきだという考え方は、その時代にはなかったでしょう。

廣瀬 いつのまにか西洋音楽一辺倒になって

吉川 平井さんや私どもが運動をして

廣瀬 邦楽科設置が是か非か論になっていったわけですね。最初に具体化したのは

吉川 具体化はしていないのではないのでしょうか。NHKに行ったり、文部省に行ったり、GHQに行ったり、動きましたがバラバラとして弱い力だったわけです。個人的な。聞く方も「そうですか」と実状を聞くだけのような。代議士連中や文部省の若い人は、耳を傾けてくれたようにも思いましたが

長廣 宮城先生はその頃は

吉川 いっしょに運動した記憶はありませんね。

長廣 邦楽科設置にいろいろなプランニングがあったと思うのですが、その中に岸辺先生が国立音楽研究所のようなものを作るべきだとおっしゃられたようですが

吉川 岸辺さんと私どもの運動の間には連携はありませんでした。岸辺さんは何かお書きになったかもしれませんが

廣瀬 話がちょっと飛んでしまいますが、小宮先生と対立して両方ともやめてしまわれたという経緯は

吉川 小宮先生には、音楽評論家の某氏は頻繁に面会されたようでしたが、我々はまったく別に邦楽科設置を働きかけていたわけです。

廣瀬 具体的にぶつかりあったのは

吉川 ぶつかるころまでいかなかったと思いますよ。私どもが、邦楽科設置を小宮先生にはいろいろ進言しましたが、あまり突っついてないと思うのですよ。だから、私も当時小宮先生と喧嘩するほど論議したことはないです。小宮先生はそのころ、私を部下だと思ってらしたでしょうし

廣瀬 それで東京芸大に邦楽科はできたのですね。

吉川 東京音楽学校には邦楽科はあったわけですが、東京芸大に発展させるという

長廣 そのころの論調で、邦楽は大学教育にはなじまないから、研究所をつくるという意見もあったようですが

吉川 岸辺さんなどは、研究所案を持ってられましたね。邦楽科ではなく邦楽研究所に力を入れた人でしたね。私は一種の宗教的な考えを持っていますから、私のためでなく、日本のためにこれが必要だと信じて動きました。

廣瀬 夏目漱石の「則天去私」の思想のようですね。

長廣 当時としてはまだ、大学の教育の中に、邦楽を入れることも喧喧譁譁であり、ましてや邦楽の研究をするにも、邦楽には理論がないなど、西洋音楽に凝り固まった人々からは言われていた時代だったのですね。

吉川 家元制度があるようなものを学校に入れることは、うまくないと言

う人もいましたね。それはそうだと
は思いますが、そうでなくて、家元
制度をやらなくても学校での教育は
できると思うのです。

廣瀬 音楽学校に一応邦楽科はあった
けれども、それが芸術大学となる時
に、またひとつの飛躍があったわけ
ですね。

吉川 それが、今言いかけたわけだ
が、洋楽評論家の某氏は邦楽を大学
教育には入れるべきではないという
反対意見でした。その方が小宮先
生に会っておられました。我々とは
意見が合いませんでした。

廣瀬 小宮先生と吉川先生が両方おや
めになってしまわれた直接のきっかけ
は

吉川 邦楽科設置に反対された小宮先
生が、設置に際してお辞めになった
ので、私が小宮先生を追い出したよ
うに言われたり、思われたりするの
はいやでしたから。

廣瀬 よくわかります。私利私欲のた
めにやったのではないということだ
すね。先生のお人柄がよくでてい
ると思います。

長廣 大学に邦楽科ができたときには、
先生は教授にはなれなかったけれ
ど、その代わり、音楽理論を専攻す
る学科、後の楽理科ですが、その構
想案をお出しになったと伺いました
が、その中に日本音楽研究を入れて
みたいとお考えでしたか？

吉川 それは人事が考えられる前の段
階で、そういう案を僕は出したと思
いますね。

NHKでの仕事

廣瀬 それ以後、先生は野におられた
わけですが、そこでもまた、いろい
ろなお仕事をされましたね。NHK
邦楽技能者育成会もそのひとつです
が

吉川 前からやっていることが、その
時からは、それを専門にやらなくて
はならなくなり、むしろ関係が深く
なったのだと思います。

廣瀬 育成会も、家元や流派にとらわ
れずにいろいろな若い人たちがいっ
しょに学んで、以後、邦楽の世界が
すごく活性化したのではないかと思
います

長廣 邦楽技能者育成会というのは昭
和30年にできて、吉川先生は、その
一番最初の頃から、講座、講義をお
持ちでした。各流派の若い人々を集
めながらという一種の教育機関とし
て、共同の

廣瀬 共通の広場として

長廣 そのように仕向けられたのは先
生のお力でいらっしゃるんですか？

吉川 それはまあ、私の力と言ってい
いか、そういうことが一般に求めら
れていて、それを私が先頭きってほ
じめたという

長廣 邦楽界でもそういうものを待ち
望んでいたということでございます
か？

吉川 待ち望んでいたかはわかりませ
んが、そういうことを望んだ人が多
かったこともたしかです。

廣瀬 それはNHKの要望とも合った
わけですね。共通の広場が必要と

長廣 先生は戦後まもなく、NHKの
放送でいろいろな邦楽の解説・啓蒙
番組にご出演になりましたが、そう

いった放送の上でのお仕事が、たとえば邦楽技能者育成会を開講するにあたって反映しているのでしょうか？

吉川 それは、ごたごたが起ころ前のことですので

廣瀬 やっぱりそういう先生の考え方が育成会に入っているような気がするんです。それぞれの家元が争うのではなく、それぞれの流派の将来を担うような若者たちをひとつの広場に集めて、みんな友達にしてしまう。そして高い技術もみがき、西洋音楽のことも、自分たちの流派のことも大切にしながら、幅広く邦楽全体のことをわかるという人材を育てなければいけないという考え方がなければ、日本の邦楽というのはずいぶん後ろ向きになっていたかもしれない。これには吉川先生のお考えが大きく反映しているに違いないと思うのですが

吉川 それは、NHKがやってくれたから、できたことですね。私の力だけではだめです。

廣瀬 でもやっぱり、核になる人がいないと、その理念は生かされなくなっちゃったでしょうし。それは、伝統の継承だけでなく、継承しながらまた、発展するということですね。伝統音楽を守り、伝えることも大切、また、その土壤に新しく生まれ、また発展させることも大切、ほかに影響を与えることも大切という、そういう開かれた伝統音楽のあり方を先生は一貫してこられましたね。

長廣 教育者であると同時に啓蒙者

廣瀬 そして必要な組織を作って、そのときの理論的指導者、核となられた。

長廣 そして、吉川先生の刺激で、いろいろな番組、教養特集とか、教育的な番組に、お知恵と人脈が動員されたわけです。

廣瀬 吉川先生のお人柄というものがなければ成り立たなかったでしょう。みなさんの信頼があって

吉川 ほんとうに、よくやりましたね。NHKの後押しがあるからですよ。

長廣 放送でお話なされたことが、後に、いろいろな形で本になっていきますね。たとえば『邦楽鑑賞の手引き』も本になったようですし、『日本音楽の歴史』は、たしか、育成会でお話なされた講義のメモが中心になっているとか。

吉川 そうでしたかね。

京都に研究センターを

廣瀬 私も、ずっと先生を遠く近くで、拝見しているうちに、伝統音楽研究センターを、どうしても存在させるべきだと考えるようになって。そういうものをどうしても京都に作らなくてはならないと思いました。京都という町が、率先して日本の伝統を大事にしていかなければ

吉川 伝統の土地ですね、あそこは

廣瀬 新しい町、京都市の姿勢もあり、かつては1100年間首都であったところでもあり、そこに伝統音楽の拠点がなくてはならないと提案しました。ちょうどその時、京都芸大の創立120年目の年にあたり、20世紀から21世紀への年であり、こういうものを作るべきだということで、市会や市の内部でも、全く反対がなかったと聞きました。

吉川 それはあなたのお力でしょう。

廣瀬 先生の御志をついで、創立したところで私の仕事が終わったと思いましたが、突然と今年の4月に所長をしろということになりましたね。ちょっと志に反しちゃったんですが。まあ、軌道に乗るまではと思って引き受けたのですが、先生がすべてのことを私心なしにやっておられるのを見習わなければならないと思っています。自分のためというより、日本とか世界にとって必要だと思われることをする。というのが吉川先生だと思うのです。それにしても、もし今、日本音楽がなくなりますと、世界の大損失だと思うのです。

吉川 ええ、ええ。多少、私には宗教的な信念があるのですよ。私は金光教という皆さんあまりご存じない宗教なのですが、小さい頃から母親に連れられて、岡山県に金光駅という駅があるのですが、あそこに参っていたのです。宗教のことを言いますといけませんのですが、自分のためではなく、人のために働くというようなことが、金光教的なのです。

海外の研究者との交流

廣瀬 いま、忽然と思い出しました。30年ぐらい前に、インドで先生が、英語でスピーチをされたときのことを

吉川 ああ、そうそう。ええ、私は語学が苦手なのですが、やらされました。

廣瀬 いや、あれは、すばらしかったですよ。ボンベイのAcademy of Performing Arts、1972年でしたが

吉川 ボンベイでしたかね。あまり人前で話したことがなくて

長廣 先生、その前に、ミシガン大学のマルム先生¹³のところで

吉川 あれは、その後です。

廣瀬 ちょうど、お箏の爪の材質を説明するときに、「bone of elephant」とおっしゃって、インド人の聴衆の一人が「ivory」と叫ぶと、会場の雰囲気ぐっとなごやかになったのを覚えています。

吉川 そうそう。あれまで、一度も英語での講演なんてしたことなかったのですが

廣瀬 ユーモアもあり、格調高いスピーチでしたよ。

長廣 そのように、インドやミシガン、その他の国際学会などでもお話されて、日本音楽の国際的な広がりという点でも大変貢献しておられますね。

吉川 多少、そういう面もあったでしょうね。日本に留学していた学生がミシガンに尋ねてきたり、ミシガンで教えた学生が日本にきたり、そういう人たちで帰国後、現地で日本のことを教えるようになった人もいます。

廣瀬 インドで私がショックだったのは、学校にピアノが置いてなくて、シタールやタブラなどの民族楽器しかないということ。自然科学とか英語とかは、西洋流にやっているのですが、音楽は自分たちの国の音楽をやっている。小学校や中学校には必ず、ピアノがあると思っていましたから。音楽は自国のものを教えていることに感動しました。あのことでインドに教えられたと思いました。外国の音楽を学ぶことも大切なんだけれど、他国の音楽だけをやっているのは恥かしいと思いました。あの時は、先生や田邊秀雄¹⁴先生も横道萬里雄¹⁵先生もいらしたし、あと、本田安次¹⁶先生や郡司正勝¹⁷先生などと一緒に東洋音楽学会主催の旅行

で、あれで、私の芸術観が大きく変わっちゃったと言えます。

この辺で先生から、後輩の私たちへ、何か教訓というか、こういうことは注意したほうがよいとか、最初にも少しおっしゃいましたが、アドバイスをお願いしたいのですが

吉川 そんな力はありませんが、やはり日本のことも、もちろん大切なのですが、日本のことだけをするのではなく、今の時代は、西洋のこともわかっていたり、しゃべれたりする人に、日本のことをやってもらいたいですね。あなたがたの底にあるものを土台にして広げられたほうが

廣瀬 ネルソンさん、オーストラリアの方で、もう20年も日本にいて、声明や雅楽を研究している人もスタッフで

吉川 ああ、そうそうそう。

長廣 外国での日本音楽研究というのは、現在どのような状況でございませうか？

吉川 私が言えるほど外国のことを知りませんが、あちらの方は日本のことも少しわかるという程度であって、日本から西洋に関心を向けるというほどではないかもしれません。

廣瀬 まあ、よく知っている人もいるだろうけれど、一般の人々には、まだ、アジアの国のひとつで中国や韓国との区別もつきにくいということではないでしょうか。

研究今昔

高橋 私たちの世代が吉川先生とのつながりを考えるときに、小泉文夫¹⁸先生という存在が非常に大きいのですが

吉川 そうですね。

高橋 小泉先生が『日本伝統音楽の研究』をお書きになるきっかけが、吉川先生の授業で、地歌「ままの川」をお聞きになったことだと、伺ったことがあるのですが、先生の側では小泉先生はどのような印象だったのでしょうか？

吉川 あのころは、不自由であったということが、結果として幸いしているということが、ほかにもあるんです。レコードや設備がふんだんにあって、授業にも簡単に使えれば、講義としてはよかったですけれども、そういうことが出来なかったことで、生の演奏をお願いするということで、小泉さんにも感動を与えることができたようなのです。東大の前で、さきほどの平井さんが箏を教えていまして、そのことを私は知っていたものですから、演奏しにきてもらったわけです。ものない時代でしたからね。レコードで聞いただけでは、彼はそんなに耳を傾けなかったかもしれない。でも不自由だったから、日本音楽研究に導いたのだとも言えるわけです。

廣瀬 そのころ、小泉文夫さんは、パイオリンを弾いて西洋音楽をやっていたわけですよね。

吉川 そのころから、小泉君や平井さんなんか、グループを作って、私のうちで、研究会や演奏会を始めたんですよ。

廣瀬 先生が生きてこられたことで、いろいろな人に刺激を与えて、また人を育てられたことはすばらしいですね。

吉川 不自由な時代に私がいたということが、逆に幸いしているということがあるのでしょうか。

長廣 日本音楽の研究の歴史を体に染み込ませてこられた、吉川先生の目からご覧になって、今の研究には、こういう点が欠けているということを感じておられると思うのですが、忌憚のないところ、お聞かせいただきたいのですが

吉川 まだ、この道の研究は十分に尽くされているとは言えないので、今の成果ややり方を否定するのではなく、その上に、さらに加速度的に、進めていけばよいと思っています。今、よい方向に向かいつつあると、感じています。

廣瀬 この日本伝統音楽研究センターも、閉じこもって机の上で論文だけを書いているのではなく、もっと社会に働きかけて、研究所が新しい運動の核となれるようにしたいとも思っているのですが

吉川 それに近いことで、私のうちで、小泉君や平井さんたちが、人数は少なかったのですが、箏や三味線をひいたり、話をしたり、実演と研究発表をしたことがありましたね。

長廣 昔は、いろいろなジャンルの人が吉川先生を中心としてひとつのサロンを作り、教養を受け入れるところがありましたが、今は大学のような組織が「共同研究」という名前で広げて進めると、焦点がぼやけるということはないでしょうか？

吉川 焦点がぼやけるというのは、表現がちょっと違うように思いますが、あのころを考えますと、もうちょっと、人と人とのよい交わりがあったように思います。

長廣 田邊先生と吉川先生の先達のご著書を読んで、すごいと思うのは、人生観のようなものが反映していること。一人でなんでも抱え込

むすごさとともに

吉川 あまり、専門化して、自分の専門領域とそれ以外との分け隔てがあってはいけないと思います。批評家が集まってあれこれと言うのではないのですから、もうちょっといい関係が築けるように、多少自分の関心とは離れていても、聞いてあげるとか聞かせてもらうとか、時には、専門を限ることもよいのですが、田邊先生のころのよさはありましたね。私は91ですが、2月13日になると92になります。

廣瀬 今、お話しくださったことはきっと、我々の研究センターのこれからの大切な指針となると思います。先生の御志の何分の一かでも継いでいけるといいと思います。

吉川 まだ、これから若い人で、まだ、十分な研鑽を積んでいない、ものを知らない人もあるでしょうけれど、そういう人にも差をつけずに、育てていっていただきたいと思います。

廣瀬 本日は本当にどうも、ありがとうございました。それではこれで、いちおう、終わりにいたします。先生、暖かくなりましたら、ぜひ京都においでくださって、我々のセンターを見てください。

注

- 1 田邊 尚雄(たなべ・ひさお 1883-1984) 日本・東洋音楽学者
- 2 田村 寛貞(たむら・ひろさだ 1883-1934) 音楽美学者
- 3 大西 克礼(おおにし・よしのり 1888-1959) 美学者
- 4 Erwin von Břiz (1849-1945) ドイツの医学者 御雇外国人教師
- 5 兼常 清佐(かねつね・きよすけ 1885-1957) 音楽音響学者

- 6 田中 正平 (たなか・しょうへい 1862-1945) 物理学者・音楽学者
- 7 辻 莊一 (つじ・しょういち 1895-1987) 音楽学者
- 8 野村 良雄 (のむら・よしお 1908-94) 音楽学者
- 9 岸辺 成雄 (きしべ・しげお 1912-) 日本・東洋音楽学者
- 10 小宮 豊隆 (こみや・とよたか 1884-1966) ドイツ文学者・演劇評論家
- 11 平井 澄子 (ひらい・すみこ 1913-) 邦楽演奏家
- 12 伊沢 修二 (いさわ・しゅうじ 1851-1917) 音楽教育家
- 13 William P. Malm (1928-) 民族音楽学者
- 14 田邊 秀雄 (たなべ・ひでお 1913-) 日本音楽学者
- 15 横道 萬里雄 (よこみち・まりお 1916-) 国文・楽劇学者
- 16 本田 安次 (ほんだ・やすじ 1906-2001) 民俗芸能学者
- 17 郡司 正勝 (ぐんじ・まさかつ 1913-98) 演劇学者
- 18 小泉 文夫 (こいずみ・ふみお 1927-83) 民族音楽学者

The Director Interviews Japanese Music Researcher KIKKAWA Eishi

This is a record of an interview between HIROSE Ryohei, Director of the Research Centre for Japanese Traditional Music, and KIKKAWA Eishi, a widely respected senior scholar in the field of Japanese traditional music. The interview was held on October 22, 2000, at the Nihon Shuppan Club Kaikan, Tokyo. It was mediated by Prof. NAGAIHIRO Hitoshi and recorded by Associate Prof. TAKAHASHI Mito.

Born in 1909 in Hiroshima Prefecture, Kikkawa graduated from Tokyo Imperial University (now Tokyo University) in 1933. He had a long teaching career at several major institutions in Tokyo, and many years

of experience in the public broadcast of traditional music. His numerous publications include the standard Japanese-language text on Japanese music history (*Nihon ongaku no rekishi*, 1965), a study of aesthetic issues in Japanese music (*Nihon ongaku no biteki kenkyuu*, 1979), and an extensive biography of the *koto* musician MIYAGI Michio (*Kono hito nari Miyagi Michio den*, 1962/1979).

In this interview, Kikkawa first relates the circumstances of his youth, his education in Western music aesthetics at Tokyo Imperial University, his studies with TANABE Hisao, and research gatherings attended by his contemporaries. He describes the leading role he played in the establishment of the Hoogaku-ka (Japanese music performance department) of Tokyo Geijutsu Daigaku (Tokyo National University of Fine Arts and Music) in the post-war years. He then spent several years with no university affiliation, involved in broadcasting at NHK (Nippon Hoosoo Kyookai, the Japan Broadcasting Corporation) and teaching at the newly-founded NHK Hoogaku Ginoosha Ikuseikai (an institute founded in 1955 for the training of young performers of traditional music, crossing the borders of traditional genres and schools). He also reminisces about his experiences overseas and the influence he had on younger scholars, and stresses the necessity of a broad understanding of the field of Japanese music as a whole.

日本伝統音楽と私

廣瀬 量平

そもそも私の音楽への意識的努力は西洋音楽に対してであった。1945年以後の日本の新しい混迷のなかで西洋音楽は一条の光明であった。それは只の音でありながらその中に人間の指標も、社会の目標をも含む貴重なものとして、現実が暗ければ暗いほど輝かしく私の中に響いた。

第2次大戦後の激動の大きな部分を北海道大学の学生として体験した私は、自分の将来について多く迷った。理論物理学への希望、数学をすすめる師、歴史学、社会科学、宗教学などへの止みがたい欲求と接近。しかし、その結果決めたことは、大学卒業式の翌日直ちに北海道をはなれ、東京に出て正式に作曲を学ぶこと、であった。札幌で身につけたと思われるものは、いわゆるクラーク博士の「Boys be ambitious!」に示された開拓精神、未知の領域を拓くフロンティアスピリット、新渡部稲造などの先輩等の影響、そして音楽の意味の発見だったようである。

かくて、東京芸術大学作曲科に入学した私だが、さしあたっては自分に欠けていた音楽の実践的技術を身につけることに専念した。音楽の知的理解を深めようなどということにとどまることは考えなかった。たとえば、対位法について知ることと、対位法的技術を身につけることとは全くちがうことである。私はまずアルチザン（職人）を目ざした。それ以外はたとえば田邊尚雄先生の日本音楽史は何故か心に残った。

西洋音楽を学べば学ぶほど、西洋、そしてその歴史と伝統に関心が深まらざるを得なかった。一応の基礎技術の習

得を終えて、いよいよ自分の創作にとりかかろうとした頃、1960年の、社会的激動を体験したことも大きかった。

この嵐の中で私は、ベートーヴェンやベルリオーズやワーグナーの夢と挫折を内側から体感、納得した。しかしその反面、日本の社会と構造とは西洋モデルとはかなりちがうことも思い知らされた。彼地の法則は我々にあてはまらないことも多い。そのことは風土や歴史や、それにはぐくまれた感性も異なり、その結果としての文化の形も、人々の願望もかなりちがう、という今からみれば当り前のことに気づいた。そしてその頃、このようなことを黙々と調査・実証しつづけてきた柳田国男の仕事の意味がわかりかけてきた。そしてまさにその頃、1962年にこの碩学は世を去られたのである。

芸術大学卒業後、演劇のための作曲をしつつ、自分の方向を模索していた私は、堀田善衛原作の「海鳴の底から」の仕事ではじめて三味線と尺八を使った。いわゆる島原のキリシタン一揆に材をとったこの劇は、カトリックの聖歌や日本人流に正調から変化された聖歌（後のオラショ）などの音楽が必要だったし、民衆の万感の思いと内心の叫びは西洋楽器になじまず、日本の楽器でしか表現出来なかった。

かくて私は1963年にはじめて邦楽器で作曲したわけであるが、これが私の転機となり、64年には尺八のために作曲したが、当時は現代邦楽という言葉もなかった。この後私は、日本伝統音楽の楽器のために作曲することが多くなった。もちろん西洋楽器のためにも多く作曲したが、両者が共存する曲の場合はそれらを調和的に扱ったことは全くなく、この両者間の対立と緊張を如何にして定着させるかを考えた。

私は、江戸邦楽の緊張感の稀薄さに何かしら物足らなさと沈滞を感じて、伝統楽器のための作品であっても、今日的な緊張を積極的に含み、はっきりとした問題提起のある音楽のみを作り出そうと心掛けた。

その後、ふとしたことからインドに行くことになる。それは1971年の秋、東洋音楽学会と日印協会との主催による、印度音楽舞踊学術視察団が、ガンジー首相の招きで訪印することになり、一人欠員があると小島美子さんが連絡して下さり、突然のこととて少しためらった後参加を決めた。

その一行は、田邊秀雄団長をはじめ、吉川英士（英史） 横道萬里雄、郡司正勝、本田安次という巨星に加えて、内田り子、小島美子、上参郷祐康、増本喜久子（伎共子）それに小泉文夫門下の逸材たち、桜井哲男、草野妙子、小柴はるみ、石原笙子（桜井笙子）大貫紀子などなどの人々、日本伝統音楽の研究を拓いた人々、拓きつつある人々、それに（初代）宮下秀冽、山川園松、菊地梯子、後藤すみ子などの邦楽家も加わり、もしこの飛行機が墜落でもしたらと、思えば恐ろしい程であった。あらゆる笛の達人、上杉紅童さんとも、この旅で初めて出会った。小泉文夫先生は空港に見送りに来られた。

その後私は作曲活動をつけ、1969年には私の尺八の作品集が芸術祭の賞をいただいた。1974年には、選ばれて日本現代音楽協会の書記長となり、78年には副委員長、84年には委員長になったが、西洋現代音楽に重心を置くこの団体の長としての仕事は必ずしも自分の価値観と重ならない部分が多いという矛盾も感じていた。

一方、1976年にNHKの委嘱で「尺八とオーケストラのための協奏曲」を

作曲して、山本邦山が演奏し、それが第25回尾高賞を受賞した。日本における西洋音楽の牙城たるNHK交響楽団が、日本の楽器を主役とする曲に賞をだしたのははじめてのことで、N響が邦楽器をやっと認知したと各方面からいわれたが、この曲はその後、現在に至るまで反復演奏され、高校教科書の教材になっている。しかもこの曲の初演10年後の1986年に東京芸大に尺八科が設置され、山本邦山はその講師となった。それまで芸大に邦楽科はあったが、尺八科がなかったのである。そして2001年の今、山本邦山はその教授である。私のしたことは極めて微々たるものであるが、ロングレンジで見れば現実には少しづつではあるが動くようだ。

ところで、同じ1976年に私が作曲した作品「天籟地響」が芸術祭優秀賞をいただいたとき、小泉文夫さんから、NHKラジオ放送で以下の言葉をいただいた。

「こういう新しい境地、あるいは新しいジャンルは、伝統を何となく受け継いだり、都合のよい素材を取り出して利用するのではなく、日本やアジアの歴史をもう一回掘り起こすような形でなされなければいけない。そういう形での伝統の活かし方が必要だと思います。従来のやり方だと素材を西洋音楽の枠にあてはめたり、日本の楽器を使っただけで本質的には西洋音楽の発想だったりして。それだとしても大切なものが死んでしまうのです。我々の本当の伝統が生きてこない。その辺のところを踏まえて廣瀬さんの今後に大きな期待をもつのですが、作品と同様に若い人達を導いてほしいとも思うのです」

今思い返せば1976年という年は私

にとって、何か偶然と思えないことが重なっている。というのは、この年、私は日本放送協会からの求めに応じて、『放送文化』2月号に一文を書いた。題して「我らの内なる縄文の音 - 日本人の音感の原点を求めて - 」である。

これ以前からNHKと縄文の石笛を求めて各地を取材旅行し、その都度放送していたことにもとづいて書いたものであるが、この反響は大きかった。作曲家の柴田南雄さんは、その著書でくり返しくり返しこの文を紹介、評価してくださったが、今や音楽考古学なる領域も形成されていて、感無量である。

そしてその翌年の77年に、哲学者梅原猛先生が学長をして居られた京都市立芸術大学へ来ることになったのは、前記小泉先生の言葉にも影響されてのことかもしれない。この大学では、かつて私自身がしてきたように西洋音楽を素材にした作曲の職人的訓練とあらゆる音楽の分析を行った。

就任14年目にあたる1991年、建都1200年を前にして、京都の世界文化自由歴史都市推進検討委員会において、その委員だった私は京都市のために必要な施策の提言を求められ、「伝統音楽の研究施設を」と提言した。当時私は音楽学部長であったが、あらゆることを考えた末、このセンターは音楽学部の一部ではなく、それから独立した施設でなければならないとした。

また、この年の3月には、京都新聞主催、21世紀会議の第2次提言において、その委員であった私は、「アジア・日本音楽芸能研究センターの設立」を提言した。

これはやがて市民、マスコミ、そして行政の側からも応援の声があり世論もしだいに高まった。1996年、私が定年退職した翌日の4月1日、私は芸術・

教育担当の嘱託との新しい辞令を受けたが、同年6月、市芸術文化振興計画の中で伝統音楽研究部門の設置が市の最重点施策として位置づけられ、調査費が計上された。同年10月、この伝統音楽部門の調査が私に依頼されて、97年4月には、実施設計費及び地質調査費、98年4月には施設建設費が認められ、17ヶ月にわたる工事が着工した。1999年9月には、私は日本伝統音楽研究センター開設準備室長に就任、開設に向けて具体的に動き出した。

そして、2000年2月に新研究棟（美術博士後期課程と日本伝統音楽研究センター）が竣工、4月開所となり、4月と5月に分けて新任研究者が着任し、私にも所長になるようにとの命が下った。

かえりみれば、私が最初に提言した1991年以来9年目に設立されたことになる。

この間にも予期しない変化もあった。例えば文部省（2001年からは文部科学省）が、一般教育の中に、伝統音楽を加えたことなどだ。我々は時流にのったのではなく、期せずしてそうだったのである。これは思いがけない誤算であった。

あのバブルの時代が終わった厳しい経済環境の今、この研究センターは夢でなく現実としてここにある。期待して下さった市民はじめ各方面の方々に感謝し、それに答えなければと思っている。全国各方面から「さすが京都」とか「まさに京都に在るべきもの」など沢山のお祝いの言葉が寄せられた。

私もこの国の音楽人として、正直いって西洋音楽が偏重されていることに何となく肩身が狭かった。自分達の仕事が自国の伝統を消滅もしくは希薄にしつつあるのではないかと、という

しるめたさである。たしかに明治開国以来の「追いつき追い越せ」も必要。「本場で通用し、賞揚されるに値する仕事をする事」もまた価値あることである。しかしそもそも音楽において“本場”という言葉がつくのは植民地主義的ではないか。

私はニューヨークやパリやウィーンやアムステルダムやヘルシンキやブラハなどの一流ホールで自作のオーケストラ作品が演奏され、成功といわれ、拍手を浴びても何故かそれが西洋音楽の枠の中での成功としが思えないということは、もしかしたら私の欲張りかもしれない。

一方、私は、ヨーロッパの古楽(early music)にもたずさわり、そのための作品も書いたが、それらは、今や欧米の大学の卒業曲目やコンクールの課題曲ともなり、コンサートのスタンダードナンバーとなっている。私の曲の演奏法を学びに日本にやって来る人々も多く、演奏旅行の曲目に加えて来日する演奏団体もある。この経験を日本の場合と倒置してみると興味深い。私がやっていることは、ヨーロッパの伝統音楽をも活性化させているらしいのだ。このことが、どういうことなのかを考えることも日本伝統音楽の未来へつなぐ方法のヒントになるかもしれないと思う。今度このセンターが設立されて動き出したことで、何かほっとしている。脱亜入欧のやりすぎで止まらなくなった結果としての主体性の喪失に対して、ささやかな一矢を報いられたであろうか。だとすれば私自身は自由になり安心して自分の作曲にも励めるかもしれない。またセンターは幸いにも幾多の優秀な研究者を迎えることが出来て、各方面の期待にも沿うことが出来ると確信している。

2001年3月10日の開所記念シンポジウムで、音楽は生体でいきいきと、とらえなくては、という発言もあった。音楽は過去の人々の素晴らしい生き方をその中に含みつつ生きていた。それを生命あるものとして、現在と未来に伝えることはむずかしいが必要なことである。伝統の継承の仕方、研究の仕方、発展のさせかたも多様であろう。そのため人々がそれぞれの得意を活かし、補い合い、多くの刺激と助力をも仰いで、広い幅を持つ大河のように、悠々と、堂々と未来に向かってこのセンターが流れてゆくことを願っている。

* * * * *

あれや、これや

久保田 敏子

日本伝統音楽研究センターが開所して、早一年になる。

本来なら、スタッフの目処が付いてから本格的な開設準備をし、それからオープンするのが順序である。ところが、この研究センターは事情が違っていた。箱が先にでき、次に人が決まって走り出したのだ。そして、中身は「走りながら考える」ことになった。まずは「研究所研究」から取り組む必要があった。当然、試行錯誤がある。行政側との調整がある。正直、この一年は大変だった。

私がこのセンターの一員になったのは、不思議な縁、以外の何ものでもない。私に学歴があるわけではない。学問的に優れた業績があるわけでもない。ましてや行政的手腕があるわけではない。あるのは山盛りの好奇心だけである。もう一つ、理由を挙げるとすれば、廣

瀬量平先生の超不思議な魅力の虜になってしまったからかもしれない。はみ出したシャツ、歪んだネクタイ、山のような書類がごちゃ混ぜに詰め込まれた鞆。そこからは想像もできない緻密で深淵な思考。研ぎ澄まされ、洗練された音の世界。冷たさの中に垣間見るハッとするような熱いプラーナ。私はいつしか、その不思議な魅力の虜になっていた。だから、「センターに来ませんか」というお誘いに、躊躇いながらも乗ってしまったのである。

私は、戦後間もないというのに、何故か小さい頃から、舞を習い、ピアノを習い、箏を習っていた。これが今に至る「お稽古フリーク」の始まりである。長じては、小遣いを貯めては歌舞伎、文楽、舞踊会、邦楽演奏会などに通った。おまけに、私には悪い癖がある。見るだけで終わらないのだ。触ってみたくもなり、覗いてみたくなるのだ。特に音の出る物には興味があり、好奇心を煽られると、もう我慢ならないのである。

そんなわけで、地歌、長唄、山田流箏曲、雅楽、篠笛、義太夫節、謡曲、声明、小唄に至るまで、チョビッと囁く「ねずみ稽古」をした。幾つかは今も続いているが、どれもこれもが中途半端。お世辞にも上手いとは言えない。だから人前では演らない。これがせめてもの公害防止の「掟」である。こんな不真面目な稽古を、師匠方はさぞや苦々しくお思いであろう。それは重々承知している。確かに邪道かもしれない。しかし、実際に少しでも体験すると、感じ方が違ってくるから不思議である。見えないものが見えてくるのだ。「囁ってみる」ことも大切なことである。そうした点からみると、平成14年度から

実施される新指導要領における伝統音楽や民族音楽への姿勢は、出会いの場を提供するという意味において、大きく評価できよう。

ところで、当研究センターが掲げる「日本伝統音楽」って何なのか。昔からあるものを新時代になっても継承していくのが伝統である、と言われる。果たしてそうなのか。今あるものをそのまま次世代に継承さえすれば伝統たり得るのか。否。それは単なるマンネリによる陳腐な因習ではないか。伝統は、時代の淘汰を経た良質の本質をもつもので、しかも周辺の変化に対応できる柔軟な力を備えているべきものである。

今、この日本伝統音楽研究センターが、求められているものは何か。それは、日本のあらゆる音楽を研究するための「核」となることではなからうか。そのためには情報発信の基地でもあらねばならない。所員自身の研究のためにも、また、諸研究の核たり得るためにも、研究成果を挙げねばならないが、そのためには研究資料を揃えなくてはならない。暴論かもしれないが、資料は原資料そのままでも良い。複写の類でも良い。文書も画像資料も、もちろん音資料も、記録資料も欲しい。そして、近い将来には、この研究センターにアクセスすれば、どんな資料が何処にあり、誰がどんな研究をしているかがわかるようにしたい。

しかしながら、資料収集といっても、この緊縮財政下では、奇特家のご好意に甘えなければならぬ部分が多い。おかげさまで、少しずつではあるが、ご理解を得て、音資料、楽器、図書、楽譜類、パンフレット、プログラム、雑誌等、それぞれに貴重なものを御寄贈頂いている。幸いにして、当センター

には、常温常湿の資料室を備えていて、まだまだ収蔵の余地がある。引き続き、暖かいご支援をお願いするとともに、これらを活用して研究者のニーズに応えられる日が1日も早く到来することを願いつつ、情報収集のアンテナの精度を高めている今日この頃である。

幸い、当センターには、若い優秀な研究者が揃っている。外部からも、素晴らしい研究者がさまざまな形で協力して下さっている。しかしながら、そうした表舞台の研究を開花させ結実させるためには、見えない部分での協力が必要である。目下の私の願いは、可能な限り私自身がその蔭の力として、縁の下を支える力になれるように努力することである。

* * * * *

番組情報から学術情報へ...

長廣 比登志

日本の伝統楽器による、伝統をいかしたあたらしい創造的な作品群を、「現代邦楽」とよんでいる。伝統音楽というと、やれ保存だ育成だ継承だ、と世間はいう。伝統音楽など、まったく眼中にない若者も、「日本人の伝統遺産だから、保存すべきだ」という。その反面、伝統楽器は昔の楽器で、アメリカの音楽がはいってからすたれた、とおもっている。他方、若手の三味線奏者や太鼓グループなどの、クロスオーバーなセッションに、若者が接すると、「邦楽はすごい」と、きいたようなことをいう。たとえその音楽が、現代邦楽作品であっても、ロック系やポップス系であっても、聴衆の評価では、「邦楽はすごい」となる。だから、

演奏会のチラシには、「邦楽レポリビューション」とか、「新感覚刺激型三味線ライブ」など、ビックリマークのキーワードがならぶ。

4年前、それまで30有余年つとめたNHKを、定年退職した。音楽番組制作現場のディレクターとして、定年の2日前まで、テープ編集の鋏を手にしてきた。最後の放送は、1996年9月28日(土)11時からのFM番組「邦楽百番」。現代邦楽作品を放送した。64年に入局して、最初にスタジオできいたのも、現代邦楽の作品だった。NHK生活のはじめとおわりを、現代邦楽にたずさわったこと、この上もないしあわせであった。

放送マンは、なによりジャーナリストでなければならない。その上で、国民がほんとうに必要とする番組情報を、適切に提供していく能力が、要求される。そのためには、「今」の一步先をみずえる眼を、やしなわなければならない。「今」の追従でなく、将来展望の予測能力に欠ける仕事は、番組を枯渇させる。そのためには、徹底した現場主義でなければならない。音楽行為、芸能行為の場に居合わせずして、どんな番組が企画できるだろうか。現場で情報を収集し、問題提起をし、もういちど現場で検証し、そして企画するという一連の流れは、野外調査につづじる。わたくしは、いろいろな現場で、番組情報の最先端に立ちあっている実感を、なんども経験してきた。

わたくしが担当した現代邦楽の番組は、毎週放送の定時番組「現代の日本音楽」という。64年4月からはじまり、72年3月で終了した。その間、実数で

500曲を越える作品が放送され、その75%が新作であった。廣瀬量平氏の作品は7曲。延べ19回放送した。わたくしが接した作品は、400曲を越える。その後、現代邦楽の番組は、名称をかえて今もつづいている。が、年間20数曲程度にとどまる。

新人職員のころ、あたらしい作品が出るたびに、現場に直行した。レコードもカセットテープも、楽譜もほとんどなかった。初演が連続した。伝統音楽にない楽器編成の作品や、洋楽器との室内楽作品、一見伝統的なスタイルでありながら、伝統音楽がうみださなかった響きなど、多種多様な作品誕生に立ちあつた。あたらしい素材と切り口、あたらしい表現手段をもとめて、作品開発にみんな懸命であった。

当時、現代邦楽の放送記録はなかった。番組担当者が、独自で作成したのもなかった。あとで知ったことだが、戦後まもなくから、現代邦楽作品は、紹介されていた。しかし、その実態について、当時しらべる手だてがみつからなかった。だから、おこがましいのだが、番組をつくりながら、ドキュメンタリーを綴っている気分であった。番組の将来を予見するためにも、番組記録作成は、どうしてもやらざるをえなかった。

もともと、ディレクターは、番組企画の段階で、放送記録に目をとおすということはない。前述のように、「今」に重点をおいた仕事をしていく上で、過去の放送を引用例として、番組に再利用したりはしない。番組は学術論文ではない。放送記録は、番組がつづかぎり、担当者のもとに保存され、放送終了数年後、だれにもわからなくな

る。では過去の放送記録は、どのように調べればよいのか。公式記録の「放送番組確定表」だけである。一か月ごとにファイルされ、放送時間、放送範囲、メディア、番組名、内容、出演者、番組担当者名が、列記してある。わたくしは、68年に、「現代の日本音楽放送記録」を、さらに70年にその後のデータを追加した「作品目録」(作曲家別・楽器編成別)を、部内資料として作成した。これは、NHK内部の情報管理のあり方に対する、危機感を背景とした、いわば自衛手段であった。さらに、録音物については、すべてではないが、できるだけ保存手続きをとった。放送初演の貴重なテープや、二度と録音できない作品が、ストックされた。

番組情報を提供する側にいたわたくしが、今度、研究センターに赴任することとなった。放送という、本質的に一回性の情報産業。つかいすてにされやすい番組情報。そのなかで、放送記録だけが、放送時における、ある作品ある演奏家の、たしかな存在を証明してくれる。そのドキュメント作成を、現代邦楽論の基盤整備作業として、起動させてみようとおもう。音楽放送文化のなかで、「現代邦楽は、なにを伝えてきたのか」という問題提起の、基盤にはなることだろう。記録の紙背から、なにかをよみとってみたいとおもう。NHKの書庫の奥で、わたくしの眼にふれるのをまっている「番組確定表」。そのなかに潜む、音の出ない現代邦楽を、まだまだ探しつづければならない。

* * * * *

現在・将来の研究テーマについて

田井 竜一

私は近年、オセアニア、特にソロモン諸島の音楽芸能と日本の民俗芸能の研究を、車の両輪のようにしておこなってきました。日本の民俗芸能の分野では、近畿地方を中心に、山車祭りの囃子の研究にたずさわってきました。日本各地には実に様々な都市祭礼としての山車祭りがあります。そして、そこでは囃子が重要な役割をはたしているにもかかわらず、一部の例外をのぞいて、本格的な研究はおこなわれてきませんでした。たとえば、有名な京都、祇園祭りの祇園囃子についても、採譜集はあるものの、基本的な事柄は必ずしもわかっていません。

こうした状況をふまえ、私は各地の行政調査に従事しながら、山車囃子の音楽民俗誌を作成することに精力をかけたわけでした。山車囃子についてかたるためには、まず曲目・囃子の機会・楽器・口唱歌(譜)・伝承過程といった基礎的な情報を収集し、それを体系化して示すことが何よりも大事なこととかがえたためです。具体的には、京都府亀岡市の亀岡祭りを皮切りに、大津祭り、大溝祭り(高島町)、長浜祭り、日野祭り、水口祭りといった滋賀県各地の山車祭り、さらには祇園祭りをはじめとして、園部町、丹波町口八田、瑞穂町質美といった京都府下の山車祭り、および伊賀上野の上野天神祭りの各囃子の調査研究をおこなってきました。現在は、京都、祇園祭りの調査を継続すると共に、水口祭りのさらに詳細な調査とCDブック形式の報告書作成事業に参画しています。

山車祭りは、音楽芸能のみならず、美術・工芸・建築など様々な分野が複雑

にからみあう、いわば総合芸術です。一方でそれぞれの地域社会にねざしたものですし、さらに歴史的な蓄積の上になりたっていることから、民俗学や歴史学の見地も必要となってきます。つまりその解明には、学際的なアプローチが必要となってくるわけです。そこで、センターでの共同研究の一環として、私が研究代表者になり、「山車囃子の諸相」という研究テーマで共同研究を実施することにしました(本報「センターニュース」p. 30参照)。上述の理由から、音楽学の研究者だけではなく、芸能史・歴史学・民俗学などの専門家にも参加していただくことにしました。これにより、山車祭りおよびその囃子について、新たな知見がえられることと期待しているところです。なお、その成果は公開講座や報告書の形で将来公開できたらとかがえています。

今後の課題ですが、先程ものべたように、センターのお膝元である京都、祇園祭りの囃子については、まだまだわかっていないことが多いというのが実情です。現在、毎年1ヶ所ずつ調査をすすめています。全体像の把握には相当の時間が必要となりそうです。また、山車祭りとしては一番長い歴史をもつものですから、音楽図像学的なアプローチによる歴史的考察も重要になってきます。その意味で、祇園囃子研究は私のライフワークになりそうです。

一方、その目途がたった段階で、「祇園囃子の系譜」をさぐるプロジェクトをたちあげたいと構想しています。京都の祇園囃子があまりに有名であるために、私達はそれが全国に伝播・分布したとかがえがちですが、実はその直系は上野天神祭り、大津祭り、亀岡祭りといった、いずれも京都近辺の

4ヶ所しかありません。幸い私自身これら4地域を全て調査する機会にめぐまれましたので、これらの地域が京都、祇園囃子のどの部分をそのまま受容し、どの部分をかえていったのかといった点について、比較研究をおこないたいとおもっています。また、これはもしかすると永遠の課題なのかもしれませんが、なぜ祇園囃子が他の地域には伝播しなかったのか、という点についてもかんがえてみたいものです。

いずれにしても、山車祭りの囃子に関してはやるべきことは山積みという状況ですが、日本伝統音楽センターという、この種の調査研究をおこなうには大変ふさわしい場所で、様々な皆様のご協力をえながら、少しでも成果を蓄積できていけたらとおもっています。

* * * * *

楽と科学に志して道づくりをしたい 高橋 美都

1970年といえば、EXPO。大阪の中学生であった私は「人類の進歩と調和」という惹句に心躍らせていた。9月に父の転勤で東京に動いたのを機に、進路を考え直し「十有五にして楽に志した」とはおこがましい。音楽学というものを知ったのが、その頃である。にわかに、ピアノ・ソルフェージュ・和声・英文読解・小論文と、普通高校への通学のかたわら、西洋音楽を教える大学の門をくぐる芸芸の習得に必死になった。入学した1974年は、東京芸大楽理科に、音楽美学と西洋音楽史の講座に加えて、日本・東洋音楽史という第三講座が開設された年である。副科

での邦楽実技習得の道も開かれ、歴史上の人物とっていた吉川英史、小泉文夫両先生をはじめ、放送や本で知る先生方の授業が受けられた。2年生で吉川先生の最終年度の演習を聴講、3年生から、修士修了後の助手期間も含めて、東京国立文化財研究所から着任された横道萬里雄先生のご指導を受け、四天王寺の舞楽で卒業論文、法隆寺の仏教行事で修士論文を書くことができた。

作曲家で西洋音楽史の研究者である柴田南雄先生と横道先生は小学校から同じクラスで、自然科学を修めた後に、人文科学への道をたどった共通点がある。横道理論といわれる、能の小段構造の分析、流派を越えるエスペラント語的な記譜の提案などは、まさにその軌跡の生んだものといえる。ワープロやパソコンが入れば真っ先にチャレンジし、70年代に、音楽学の学生にも、コンピューターの基礎を学ばせるべきだと提案されていた。横道先生の授業は、分析のための用語を新しく生みだし、装束をつけた役者の絵をさらさら書き、左右の素手で大鼓・小鼓の手を打ちながら、囃子の掛声までいっしょに入れて謡ってしまい、教卓に飛び乗って所作を示すという流儀で、ノートにとることは困難であったが、刺激に満ちていた。「科学する」という言い回しがはやったその頃、伝統芸能を科学しているという実感がたしかにあった。

大学院修了後、2000年5月に日本伝統音楽研究センターに採用されるまでの約20年は、早回しになるが、非常勤の助手・講師・研究員・調査研究員・嘱託というような形で、さまざまところで働かせてもらってきた。おもに「日本音楽概論」とか「日本音楽史」という授業を担当したが、吉川先生の記念

論文集にあやかると「日本音楽とその周辺」をさすらい、まわり道も多かった。もっとも長く、教養課程の移転直後から15年お世話になった青山学院大学の厚木キャンパスはこのほど、20年の歴史を閉じて再移転が決まった。また、第二の出身校と感じている、東京国立文化財研究所にも8年間お世話になったが、2000年に新庁舎に移転、2001年度からは独立法人化するのだという。まさに、月日は流れたと感じさせる。

日本伝統音楽研究センターで何をやりたいか、どんな抱負があるかと問われると、力を込めると弾けそうなくらいである。勤務の隙間に研究する状況から、研究が仕事と変化したのである。研究用資料ストックとして詰め込んでいる段ボール箱を片っ端からあけて、やり直したいことがたくさんある。

卒業論文のテーマに、螺旋階段を一周したように回帰するなら、舞楽を、広い視野から扱いたい。外来音楽の日本化、中央文化の地方化、各地の伝承の独自性と共通性などの枠組を加え、20年あまりの間に恵まれた人脈を組織化できたら、すばらしいと思う。

また、ともに文化財研究所の名誉研究員である横道・佐藤道子という二人の恩師に導かれながら、停滞していた仏教法会の音楽構造分析は、関西に住むという地の利が加わったので、側溝にかかっていた轡を一步步でも前に動かしたい。平安京文化研究会、唱導文学会など、活発な活動をしている関西のグループに学ぶことができるのも、力強い轡と拍車になるであろう。

研究センターの一員として、自分に何ができるかという問いかけは、答えに窮する。「センターのためになることを何かしたい」という発言をした時に

は、轡轡を買ってしまった。おそらく自分の頭の蠅も追えない人間が、生意気なことであつたらう。自分がやりたい方向で、従来の研究の切り口と違って、未来志向のものへの抱負と言いかえて、センターの概要などに「日本音楽情報論」という聞き慣れない名称をあげた。情報の集積と二次加工というのは、少なくともいままでの、論文を業績としてみる学問体系の分野名にはあまりないと思う。やりたいことは、現在、そして未来に、京都市内、日本国内、世界各地から日本音楽に興味を向ける人に、知りたいことに容易に早く近づける高速道路のようなものを用意する手伝いをしたいということである。筆写していた時代から、刊本がでた時代、木版が活版になった時代、写真植字ができた時代、電算写植や電子コピーができた時代、コンピューターが研究機関に導入された時代、家庭に普及した時代、コンピューター同士がネットワークを組むようになった時代と、情報の集積や伝達のありようは大きく変わったと思う。文字情報と画像や音声、動画を一元的に扱えるようになった今、遠隔地の人とも共同作業ができるようになった。伝統音楽の研究にも科学の時代は到来している。

大学の同級である東京国立文化財研究所芸能部主任研究官の高桑いづみさんが、平成5年以来続けている楽器調査に加えてもらっているが、その延長で、楽器のデータベースをまず試作し、各地の楽器所蔵先のご協力がいただけるようになるまでの道づくりを、私の当初の任期、平成16年度までに基礎工事完了ともっていきたい。

* * * * *

来日からの20年を振り返って スティーヴン・G・ネルソン

2000年4月に、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターへ赴任したが、オーストラリアで生まれ育った私が初めて来日したのは、1980年4月であった。奇しくも満20年目の、まさに同じ月であった。2度目の成人式を迎えたような、全く不思議な偶然と思わざるを得なかった。世間から見れば、外国籍の私が「日本伝統音楽研究センター」なる場所に所属していること自体、不思議に思われるかもしれない。そこで、今までの自分の歴史を簡単に紹介し、赴任の弁と替えさせて頂くことにしたい。

大学院生として来日したが、学部生時代はシドニー大学の音楽学科で音楽学の勉強をした。2年生の「西洋音楽史」と「和声・対位法」の担当教官(ケンブリッジ大学出身のDr. Nicholas ROUTLEY)から多大な影響を受け、卒論ではシェーンベルクの初期の歌曲と表現主義との関連性について音楽史・音楽分析の観点から論じたりもしたが、同じ4年生の時から、日本の雅楽の古楽譜『博雅笛譜』についてケンブリッジ大学で博士論文をまとめ、30歳前後という若さでシドニー大学へ赴任してきたDr. Allan MARETTから指導を受けるようになった。

以前から雅楽の不思議な音の世界に強い魅力を感じていた私は、中国語の古典(つまり「漢文」)の勉強を少ししていたこともあって、それほど迷わずにマレット氏のもとで雅楽の研究を始めた。そして留学を考えた時、祖父母の代で捨ててきたヨーロッパへ今更戻るよりは、と、マレット氏の強い後押しもあったため、日本政府、文部省の

外来研究留学生のための奨学金に応募した。日本語が全く不自由であったにもかかわらず受かったのは幸運であった。

当初は、東京芸術大学に研究生として籍を置きながら文献資料の調査を行い、雅楽の楽器、特に箏の实技を学び、2・3年で帰国しようと思っていた。しかし、そうはいかなかった。指導教官となった故小泉文夫先生に勧められて修士課程に入学することになった。小泉先生は「雅楽は私の専門ではないから、まず上野学園の福島和夫先生のところに行きなさい、平野健次先生の授業を取りなさい、民俗音楽ゼミの単位をあげるから小野雅楽会でもっと実技をきなさい」などと、今から考えれば指導教官として完璧なアドバイスを下さった。

言うまでもなく大学の授業や演習は、ついていくのが大変であったが、横道萬里雄先生の日本音楽史の講義、蒲生美津子先生のゼミなどで色々な発見があり、特に蒲生先生には修論のテーマ(『五絃譜』の解説)を与えられたようなものであった。また、日本語がままならぬ自分にとって誠に有難いことに、留学生のための楽書講読を設けて頂いたが、私と故リン・ワカバヤシさんが、『糸竹初心集』の変体仮名と戦った。その時根気よく教えてくださった高橋美都氏が、今では同僚となったのが何とも嬉しいことである。

こういった出会いが貴重であったのは言うまでもないが、今の私を形作ったのは上野学園日本音楽資料室の福島和夫先生との出会いであった。マレット氏もお世話になったことがあり、私がお世話になったことでもとても暖かく受け入れて頂いた。83年からは非常勤の研究員をするようになり、短い間

に日本音楽関係のさまざまな文献資料に、第1人者の指導のもとで接することができた。また声明の新井弘順氏というよき先輩研究員との交流も生まれ、平安・鎌倉時代の音楽史を理解するには声明に対する理解も不可欠であるという意識を持つようになった。

85年には、東京芸術大学の博士課程に入学した。テーマは雅楽と声明が絡み、しかも歴史的に最も興味深い平安院政期の音楽に関わるように、『順次往生講式』の伎楽歌詠を選んだ。唐楽の旋律に極楽浄土関係の詞章をつけて歌う「極楽声歌」、催馬楽の詞章を替え歌ふうに読み替えて歌う「西方楽」講式というものの成立背景、などなど、今から思えば当時の自分にはいささか手に余るテーマであった。博士論文は結局まとまらず、満期退学することになったが、今でも同じテーマで研究を続けていることも事実である。

89年からの慶應義塾大学文学部の音楽学の非常勤講師をはじめ、その後明治学院大学文学部の芸術学科、国際基督教大学教養学部などで日本音楽の概説、日本・東洋音楽史の講義を担当するようになった。そのほとんどは研究センターに赴任するまで続いたが、その間、学生の学力低下、日本音楽に対する拒絶反応を感じながら、音楽専攻でない学生に、いかに日本の音楽に興味を持たせるかについて苦心してきた。慶応では国文・国史専攻の学生が音楽説話などに興味を持って、それが音楽史への関心に繋がっていくこともあったが、指導者としての満足感はむしろ国際基督教大学の留学生を白紙状態から指導することから得られたように思えて仕方がない。皮肉なことであるが、これからの日本の音楽教育がどのように変わっていくか、面白い立場から見

守ることになった。

私にはもう1つの音楽家の顔がある。東京での最初の5年間を過ごした下宿先では、「お兄さん」と私が呼んでいた家主の息子さんが、地歌箏曲の米川文勝之師（今の2世米川文子師）に師事していた。来日したばかりの私には箏曲を学ぶ意思是毛頭なかったが、1度見学に行ったら圧倒され、「私も」ということになった。長い話になるので省くが、今ではこの世の中で最も心地よい音楽と私が思っているのは地歌箏曲であり、特にいわゆる「京風手事物」が大好きである。研究はどこまで出来るかわからないが、この「大好きである」という感覚を、出来るだけ多くの人々と共有できるように努力していきたいと思っている。

日本伝統音楽研究センターにおける自分の役割について、まずは2つ大きな任務があるように感じている。1つは日本音楽関係の資料の収集・整理・保存に努めること。限られた予算、今後の厳しい経済状況の中で、例えば上野学園日本音楽資料室のような網羅的な収集はまず無理であろうが、明治以降の研究図書をそろえ、和装本に関しては代表的なものを少数、そして各機関の重要な写本・版本類を写真や画像データといった形で集めて、資料室の充実を図りたい。

もう1つは、私が英語を母語とする外国人であることから言わずもがなという印象を持たれるかもしれないが、研究センターが文字通り「センター」（拠点）として、日本国内に止まらず世界的にも機能するように、海外の日本音楽研究者との交流に努め、日本における研究状況などを正しく発信することに力を注ぎたいと思っている。

センターニュース

(2000.04.01 ~ 2000.12.31)

< 人事・採用及び異動発令 >

2000年4月1日

センター所長 廣瀬量平

教授 久保田敏子

助教授 田井竜一

助教授 スティーヴン・G・ネルソン

センター事務室事務長 今井洋

センター事務室担当係長 野村征理代

センター司書 井口はる菜

2000年5月1日

教授 長廣比登志

助教授 高橋美都

センター事務室事務職員 後藤千香代

2000年9月1日

研究補助員 伊藤志野

研究補助員 今井敏行

研究補助員 四宮豊

2000年10月1日

特別研究員 井澤壽治

特別研究員 上杉紅童

特別研究員 尾関義江

特別研究員 中原香苗

特別研究員 山田智恵子

< 大学・センター公式行事 >

京都市立芸術大学創立120周年記念式典

2000年7月1日(土)

本学講堂、大学ホール他

1. 記念式典 講演

(京都市立芸術大学主催)

司会 事務局長

10:00 記念演奏(祝祭前奏曲 指揮 増井
信貴助教授)*廣瀬量平作曲

10:20 開会の挨拶 西島安則学長

10:40 祝辞 榎本頼兼市長

10:45 祝辞 二之湯智市会議長

10:50 来賓の紹介

11:00 記念講演 兵庫県立近代美術館
木村重信館長

11:45 式典終了

2. レセプション 大学会館ホール他
(120周年記念事業実行委員会主催)

第1部 (大学会館ホール)

司会 佐野敬彦美術学部長

12:00 開会の挨拶 上村淳副学長

12:05 梅原猛元学長

12:10 乾杯 上山春平前学長

13:00 閉会の挨拶 岸邊百百雄音楽学部長
第2部 (大学会館交流室、本部練食堂、学
生・留学生によるパーティー)

京都市立芸術大学新研究棟披露式

2000年12月2日(土)

大学院美術研究科博士(後期)課程及び日本
伝統音楽研究センター開設記念

1. 披露式

10:00 開式

10:03 式辞 西島安則学長

10:15 経過説明 佐野敬彦美術学部長
経過説明 廣瀬量平日本伝統音楽研
究センター所長10:25 設置者挨拶 榎本頼兼市長 (中谷
佑一副市長)

10:35 来賓挨拶 二之湯智市会議長

来賓挨拶 沖縄県立芸術大学 阿部
公正学長

10:45 記念講演 梅原猛元学長

11:30 祝舞 五世井上千代氏
曲目:柱立

11:45 閉会の挨拶 上村淳副学長

2. 新研究棟披露

3. レセプション(大学会館ホール)

司会 野口美子

12:15 開会

挨拶 西島安則学長

挨拶 上山春平前学長

挨拶 愛知県立芸術大学 川上實学長

挨拶 金沢美術工芸大学 乾由明学長

乾杯 今枝徳蔵市会副議長

13:15 閉会挨拶 岸邊百百雄音楽学部長
披露式には市民約200人も参加

4. 開設記念展示

(1) 文楽人形浄瑠璃 故四世竹本津大夫遺
品(新研究棟7階 展示ケース)

2000.12.02 ~ 2001.01.31

四世津大夫舞台写真(3点)/四世津大夫・

六世寛治舞台写真 / 三世津大夫写真 / 洗い朱塗り金泥見台 / 京塗り高蒔絵見台 / 総桐見台(2点) / 江戸時代人形浄瑠璃座表 扇面図 / 七功人 扇面図 / 御霊文楽座 扇面図 / 四世津大夫襲名記念扇子 菅桶彦画 / 義経(勸進帳) 扇面図 / 古梅図 / 豊竹山城少掾筆 萬覚 / ガラス版写真原版(3名人) 三世越路大夫 竹本撰津大掾、のちの豊澤廣助 / 撰津大掾 掾号披露興行の番付 / 吉田難波掾手ぬぐい / 豊竹山城少掾手ぬぐい / 三勝の書置 / 竹本住大夫口伝 / 「男作五雁金」越後町の段 床本 / 「菅原伝授手習鑑」配所の段 床本 / 「四谷怪談」伊右衛門住家段 床本 / 「撰州合邦辻」下之巻 床本 / 「源平布引滝」三段目 床本 / 「義経千本桜」狐(四の切) 床本 / 「伊勢音頭恋寝刃」十人切の段 床本 / 「勸進帳」床本 / 「木下蔭狭間合戦」竹中砦 床本 / 「近頃河原達引」堀川の段 床本 / 「八陣守護城」床本 / 六世鶴澤寛治筆 天清鶴の舞 / 豊竹山城少掾筆 壽 / 吃語り用口伝 / 葎場のお染 舞台写真 / 横尾忠則画 楯説弓張月 東京国立小劇場ポスター原画 / 紋下招き看板

(2) 地歌・箏曲家 北川芳能遺品
(新研究棟7階 展示ケース)

2000.12.02 ~ 04
北川芳能(雅楽能)写真2点 / 琴傳四世作十三弦箏「巖波」 / 琴傳八世作 大十七弦 / 巾柱 / 十三弦箏用 箏柱(2組) / 十七絃箏用 箏柱 / 北川芳能遺愛の三味線撥(5点) / 玲琴

(3) 酒井信好写真展 鄙の舞楽 in 京都
(新研究棟7階 合同研究室2)

2000.12.02 ~ 2001.01.31
*パネル写真 (1) 新潟県西頸城郡能生町「白山神社の舞楽」行事次第の全容(1990 ~ 2000年撮影)(2) 糸魚川市「天津神社の舞楽」(3) 静岡県周智郡森町「小國神社の十二段舞楽」(4)「天宮神社の十二段舞楽」(5) 山形県(と宮城県)の舞楽「林家舞楽」「慈恩寺舞楽」「平塩舞楽」・宮城県名取「熊野神社の舞楽」参考出品: 新潟県弥彦神社「太々神楽」、大阪四天王寺舞楽
*額装写真 『陵王乱舞』:「林家」「慈恩

寺」「平塩」「名取熊野」「弥彦」「能生白山神社(2点)」「天津神社」「小國神社」「天宮神社」のさまざまな陵王 参考出品:「能生白山神社」の納曾利と能抜頭
*静岡県森町教育委員会撮影ビデオ 『雨宮神社の十二段舞楽』より「大平楽 急」上演

(4) 『重要無形文化財 雅楽(宮内庁式部職楽部)』ビデオ 第7巻より 舞楽「大平楽 急」上演

21世紀京都幕開け記念事業・京都21
2000年12月31日 ~ 2001年1月1日
灯路祭 大行灯書画提供(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター有志)

<大学・センターの出版物>

『京都市立芸術大学・これから(京都市立芸術大学 自己点検・評価報告書)』
編集:京都市立芸術大学将来構想検討委員会 発行:京都市立芸術大学 1999年 第3章 日本伝統音楽研究センター pp. 143 ~ 147 第4章 研究施設棟建設 pp. 147 ~ 151 に関連事項がある

京都市立芸術大学 芸大通信特別号 発行:京都市立芸術大学広報委員会 2000年4月1日 p. 2 いよいよ『日本伝統音楽研究センター』開所!

『京都市立芸術大学創立120周年記念10年略史』 編集:京都市立芸術大学創立120周年記念10年略史編集委員会 発行:京都市立芸術大学 2000年4月1日 3. 日本伝統音楽研究センター pp. 63 ~ 66 5. 諸記録 pp. 75 ~ 96 に関連事項がある

『京都市立芸術大学 概要 2000』 発行:京都市立芸術大学 p. 10 日本伝統音楽研究センター

『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要 2000』A3 2つ折り4色刷 発行:京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 配布は2000年12月2日以降(書式を若干改めて、本報 pp. 38 ~ 39 に所収)

Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts, 2000

(上記概要の英語版) A4 横 3 つ折 発行：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 配布は2000年12月2日以降(書式を若干改めて、本報 pp. 40 ~ 42 に所収)

『京都市立芸術大学新研究棟』(建物の概要と写真紹介) 発行：京都市立芸術大学

< インターネットホームページ掲載 >

京都市立芸術大学ホームページ

<http://www.kcuu.ac.jp>

公式ページ「大学案内」

<http://www.kcuu.ac.jp/about/aboutj.html>

に「日本伝統音楽研究センター」日本語版

<http://www.kcuu.ac.jp/about/rc-jtmj.html>

と「Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts」

<http://www.kcuu.ac.jp/about/rc-jtme.html>

を掲載(2000.10.04)

< 共同研究 >

邦楽歌詞研究 I ~ 地歌・箏曲 ~

研究代表者：久保田 敏子

共同研究員：小野恭靖(大阪教育大学助教授・歌謡研究)、佐々木聖佳(甲南女子大学文学部非常勤講師・歌謡研究)、鈴木由喜子(京都女子大学非常勤講師・近世邦楽)、永池健二(関西外国語大学教授・歌謡研究)、野川美穂子(東京芸術大学非常勤講師・近世邦楽)、真鍋昌弘(奈良教育大学教授・中世近世歌謡研究)、山根陸宏(天理大学附属天理図書館司書・近世邦楽)

*主として座敷音楽として伝承されてきた邦楽である地歌・箏曲は、「語り物」にはない「歌謡」としての面白さがある。現在、歌謡の専門家を交え、「三味線組歌」の歌詞の諸本校合と、関連歌謡、語釈、などを分担し考察・研究している。歌謡と音楽の両面からの総合的研究として、非常に意義深く、良い成果が期待される。今年度は「表組」を中心に行った。

山車囃子の諸相

研究代表者：田井 竜一

共同研究員：青盛 透(京都市立芸術大学助教授・

芸能史)、岩井正浩(神戸大学教授・音楽学)、入江宣子(仁愛女子短期大学非常勤講師・民俗音楽学)、植木行宣(京都学園大学教授・芸能史)、垣東敬博(福井県立若狭歴史民俗資料館学芸員・民俗学)、樋口 昭(埼玉大学教授・日本音楽史)、福原敏男(国立歴史民俗博物館助教授・歴史民俗学)、増田 雄(三重県立上野高等学校非常勤講師・歴史学)、米田 実(水口町立歴史民俗資料館学芸員・民俗学)

*日本各地には多数の山車祭りが存在し、その多くが囃子をともなうが、それらの個別的な調査研究や総合的な把握は非常におこなわれている。本共同研究は、日本文化史や芸能史の上での山車祭りの位置づけを再検討し、それを元に山車囃子の特質と系譜を考察しようとするものである。同時に、将来における京都・祇園祭りならびに祇園囃子の総合的な研究の手がかりとすることも目的としている。また、山車祭りが複合的な性格をもっていることから、音楽学・芸能史・民俗学・歴史学等の幅広い専門分野による、学際的アプローチをとる。

*第1回研究会 2000年11月18日(土)
共同研究の趣旨説明、話題提供：植木行宣「山・鉾・屋台の祭り」と囃子」、総合討論：今後の研究会の進め方について

琴・箏の系譜 楽器、文献と奏法

研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン

共同研究員：青木洋志(上野学園日本音楽資料室研究員)、磯水絵(二松学舎教授)、遠藤徹(東京学芸大学専任講師)、福島和夫(上野学園日本音楽資料室室長)、和田一久(福井工業大学講師)

*琴箏類は日本の音楽史を貫く、大きな存在である。古代から近世、そして現代に至るまで、この属の楽器が活躍しなかった時代はない。日本古来のコト(和琴、ワゴンノヤマトゴト) 中国から8世紀までに伝来した琴(七絃琴)や箏は、さまざまな音楽の中で用いられてきた。その系譜を明らかにすることには大きな意義があるといえる。

*手始めとして、本共同研究では、日本の古代史の文献、六国史の『日本三代実録』を取り上げ、そこに表れた音楽関連の項目を抽出し、検討することにより、文字の上だけで

は区別しにくい琴等のどの種類が、どのような場面で用いられたかを解明しようとしている。同時に、平安時代から鎌倉時代にかけて編纂された箏の楽譜集成(『仁智要録』『類箏治要』)をさまざまな観点から分析し、雅楽における箏の奏法の変遷を考えている。分析の前提として、それぞれの楽譜集成の写本類を校合(比較対照)することにより正しいテキストに遡る必要があるため、本文研究も主たる目的の一つとなっている。なお、そうした楽譜集成を正しく理解するには、そこに含まれている中国文献の、夥しい数の引用を、原典から明らかにすることが必要である。そこで、中国文献が豊富に所蔵されている教育機関に所属する学者の協力をお願いすることとなった。

* 打ち合わせ 2000年8月24日(於:上野学園日本音楽資料室)

* 第1回研究会 2000年11月11日(土) ~ 12日(日)

* 第2回研究会 2000年11月25日(土) ~ 26日(日)

* 第3回研究会 2000年12月16日(土) ~ 17日(日)

研究会はいずれも京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターにて行った。

<委託研究>

音楽図像学の基礎研究 国立音楽大学非常勤講師(音楽学) 勝村仁子
舞楽関係映像の記録作成 舞楽写真家 酒井信好
三曲合奏における尺八の意義 尺八研究家 森田柁山

<センターの学外協力>

日本歌謡学会 平成12年秋季・(社)東洋音楽学会第51回合同大会事務局(現地事務局は金沢市ネオ企画) 2000.10.7(土) ~ 8(日) 大会プログラムは日本伝統音楽研究センターが作成

京都の民謡録音資料に関する協力

1982 ~ 1983年にかけての「京都府民謡緊急調査」では、90分コンパクトカセットで約200本という、膨大な録音記録がなされた。これらには、調査協力者との話のやりと

りがそのまま収録されており、民謡がうたわれてきた背景にあたる内容も多数ふくまれ、民謡の記録にとどまらない民俗総体の記録として貴重なものになっている。しかしながら、調査から20年近い時間の経過の中で、磁気テープの劣化にともない、貴重な資料が消滅する危惧がでてきた。それらの録音資料の保存・活用をはかるため、当時の調査員を中心にして、京都府民謡記録研究会が結成された。センターは同研究会に協力し、すべてのアナログ録音をセンター視聴覚編集室においてデジタルに変換し、研究会とセンターの双方で永久保存すると共に、学術研究に供する予定である。

<研修会>

「研究所の社会的使命」講師 久万田晋(沖縄県立芸術大学付属研究所助教授) 2000年7月26日(水) 午後3時 ~ 5時 於:センター会議室

<所員の活動>

廣瀬 量平

著作活動

* 2000.05.09 作品演奏 「市民のためのファンファーレ」「朝のセレナーデ」

<芸術祭典・京> オープニングコンサート 京都コンサートホール

* 2000.05.26 作品演奏 箏独奏のための十段「瓊」 演奏:河原伴子 東京オペラシティー近江楽堂

* 2000.06.01 解説執筆 『船内くまなく尋ねたれども~現代俳句の100冊 杉野一博句集』 発行:現代俳句協会

* 2000.07.01 作品演奏 「祝祭前奏曲」京都市立芸術大学創立120周年記念式典 演奏:京都市立芸術大学学生オーケストラ 指揮:増井信貴

* 2000.09.20 作品演奏 「尺八八重奏によるブルートレーン」 演奏:日本音楽集団(東京)本郷バリオホール

* 2000.10.09 作品演奏 「ラメンテーション」ベルギーフランダース四重奏団 日本公演 東京オペラシティー近江楽堂

* 2000.10.14 作品演奏 「ハーブのための悲歌」 演奏:内田奈織 京都芸術センター

- * 2000.10.27 ~ 28 初演演奏「ギタンジャリ~タゴールの詩と音楽(朗読と弦楽四重奏曲)」朗読:林洋子、演奏:アンサンブルライン 東京都目黒迎賓館
- * 2000.11.13 初演演奏「北の森林」演奏:野田広志、谷本聡子 札幌ルーテルホール
- * 作品演奏「はなしづめ~箏独奏のための」後藤すみ子独奏会(現代邦楽創始時の曲を含めて)2000.11.21 京都アバンティホール/2000.11.27 (東京)本郷コンサートホール/2000.12.02 富山サンブラザホール
企画・演出・口述活動
- * 音楽・舞踊部門プロデューサー就任 <芸術祭典・京> 2000.01.17 東京記者発表 東京會館
- * 2000.05.09 <芸術祭典・京> オープニングコンサート 京都市交響楽団、矢崎彦太郎(指揮)京都コンサートホール
- * 企画・監修・解説 <芸術祭典・京> 醍醐寺に集う音楽と踊り
- ・ 2000.05.12 ~ 13 「アイルランドのケルト音楽と踊りを京の緑の中で」
 - ・ 2000.05.14 ~ 15 「はるかな草原の調べ~モンゴルの唄と馬頭琴」
 - ・ 2000.05.16 ~ 17 「京都で津軽三味線と津軽民謡に思いっきりひたろう」
 - ・ 2000.05.18 ~ 19 「海の都の雅び~沖縄宮廷舞踊の格調と三線のひびき」
 - ・ 2000.05.20 ~ 21 「あの“出雲のお国”の昔を伝える綾子舞」
- * 2000.05.14 <芸術祭典・京> ピクニックコンサート 京都市左京区花背山の家
- ・ 「林洋子宮沢賢治ひとりごとがたり “雪わたりに(小狐たちと子どものかわいい信頼のものがたり)”」
 - ・ 「小さなオーケストラで大きな名曲コンサート」
- * 2000.05.18 <芸術祭典・京> 「神谷郁代ピアノリサイタル」京都コンサートホール
- * 2000.05.20 <芸術祭典・京> 「体験コンサート 日本の声 日本の唄~日本の発声のワザと魅力にせまる」講師:平井澄子、司会:久保田敏子 京都金剛能楽堂
- * 2000.05.25 <芸術祭典・京> 「フルートの隠れた名曲を集めて~黄金の響き」演奏:清水信貴・山上友佳子 京都コンサートホール
- * 2000.05.28 <芸術祭典・京> 「フランス近代ソナタ~魅惑の名作」演奏:渡辺穰・藤井一興 京都コンサートホール
- * 2000.05.27 ~ 28 <芸術祭典・京> 「鬼才岡本忠成の残した不朽のアニメ集~廣瀬量平の作曲による」京都芸術センター
- * 2000.10.15 企画と解説「いま唱歌が輝いている」滋賀県高島町ガリバーホール
- * 2000.10.19 ~ 20 企画・監修・解説 <京都の秋音楽祭> 「京・若い作曲家連続作品展」第25回・第26回 京都コンサートホール
調査・取材活動
- * 2000.04.12 桜井市ホケノ山古墳調査
- * 2000.04.28 福井県三方町 縄文博物館 開館式
- * 2000.06.08 立命館大学アトリサーチセンター見学
- * 2000.07.16 松尾大社 御田祭調査
- * 2000.08.09 松尾大社 八朔祭調査
- * 2000.10.30 八橋流箏曲調査 長野県松代市 真田家
- * 2000.11.29 大阪府立弥生文化博物館視察「卑弥呼の音楽会」
対外活動
- * 通年 同志社女子大学大学院 非常勤講師「音楽分析法」
- 久保田 敏子
著作活動
- * 2000.11.30 論文「仏教音楽と軍記語り」『軍記語りと芸能』(編者:山下宏明他)汲古書院(東京)pp. 3 ~ 21(軍記文学研究叢書12)
- * 2000.04 ~ 12 連載楽曲解説(1)~(5)
『楽報』892号~900号
- (1) 「桜川」892号 4月 pp. 2 ~ 3
 - (2) 「若菜」894号 6月 pp. 2 ~ 3
 - (3) 「さむしろ」896号 8月 pp. 2 ~ 3
 - (4) 「越後獅子」898号 10月 pp. 2 ~ 4

- (5) 「千鳥の曲」900号12月 pp. 2~3
- * 2000.08 CDアルバム解説 「菊原光治 地歌の世界」(2枚組/日本コロムビア) COCJ-31032 ~ 33
 - * 2000.04.22 琴友会演奏会 プログラム (大阪)サンケイホール
 - * 2000.05.08 上方を舞う プログラム (大阪)ワッハ上方
 - * 2000.06.17 宮城道雄を偲ぶ箏の夕べ プログラム(大阪)いずみホール
 - * 2000.11.12 レクチャーコンサート桐絃社 シリーズ演奏会「風の音・鳥の声」 プログラム(大阪)フェスティバル・リサイタルホール
 - * 2000.12.04 弾き語り創作邦楽作詞初演 「城山狸」作曲・演奏 東音中島勝祐 (東京)紀尾井ホール初演 企画・演出・口述活動
 - * 講演
 - ・ 2000.10.29 知る学講座「近代箏曲への道~楯城護の足跡~」(滋賀県)秦荘町歴史文化資料館記念講演
 - ・ 2000.11.25 府中市教養セミナー・生活と文化「箏曲の流れを追って」(東京)府中市生涯学習センターホール
 - * 解説
 - ・ 2000.04.07 大倉佐和子リサイタル(京都)府民ホールアルティ
 - ・ 2000.04.22 なにわ芸術祭参加祥門会演奏会(大阪)メルパルク
 - ・ 2000.04.30 久貝美弥子リサイタル(京都)府民ホールアルティ
 - ・ 2000.05.05 伝統芸能鑑賞会(大阪)豊中伝統芸能館
 - ・ 2000.05.20 <芸術祭典・京>「日本の声・日本の唄」(京都)金剛能楽堂
 - ・ 2000.05.27 日本歌謡学会春季大会芸能解説(大阪)関西外国語大学
 - ・ 2000.06.17 宮城道雄を偲ぶ箏の夕べ(大阪)いずみホール
 - ・ 2000.07.09 ジャパンネ・コンサート~浄瑠璃~(大阪)クリエートセンター
 - ・ 2000.07.15 古典勉強会(大阪)エナジーホール
 - ・ 2000.08.19 全国学生邦楽フェスティバル鑑賞会(京都)法然院
 - ・ 2000.09.03 がんばれ日本の音トーク
 - ショウ(大阪)ルミエールホール
 - ・ 2000.09.10 祥門会演奏会(大阪)国立文楽劇場
 - ・ 2000.09.24 三味線本手演奏会(大阪)国立文楽劇場
 - ・ 2000.10.22 小林早苗チャリティコンサート(兵庫)ベガホール
 - ・ 2000.11.12 レクチャーコンサート桐絃社シリーズ演奏会「風の音・鳥の声」(大阪)いずみホール
 - ・ 2000.11.30 大阪文化祭参加永廣孝山尺八リサイタル「委嘱作品集」(大阪)クレオ大阪西
 - ・ 2000.12.16 山口朋子リサイタル(奈良)奈良百年会館ホール
 - * 放送出演 「夏の邦楽」『邦楽のたのしみ』(NHK第2放送 7月毎日曜日5回 17:00~17:30 毎土曜再放送 12:10~12:40)
 - 調査・取材活動
 - * 2000 秋 奥村家琵琶関係委託資料調査 対外活動
 - * ~ 2000.08 (社)東洋音楽学会 会長・編集委員・第51回大会実行委員
 - * 文化財保護審議会第四専門調査会専門委員
 - * 兵庫県伝統芸能等検討委員
 - * 京都音楽祭実行委員
 - * 運営委員・アドヴァイザー
 - ・ 奈良県万葉ミュージアム
 - ・ 大阪21世紀協会
 - ・ ワッショイ2000 世界民族芸能祭
 - ・ 京都コンサートホール
 - ・ 松伏町エローラホール
 - * 審査員
 - ・ NHK 邦楽オーディション
 - ・ 大阪府舞台芸術奨励新人
 - ・ 京都市芸術文化特別奨励制度
 - ・ 第7回賢順記念箏曲コンクール
 - ・ 社団法人日本尺八連盟コンクール
 - ・ 文化庁在外研修・インターンシップ
 - ・ ピクチャー伝統文化振興財団邦楽技能者オーディション
 - * 同志社女子大学非常勤講師「音楽文化研究IIa, IIb」(音楽図像学からみた音楽文化史)
 - * 大阪音楽大学非常勤講師「箏曲概論」(集

中講義)

長廣 比登志

著作活動

- * 2000.06.05 曲目解説 『第41回 [森の会] 定期演奏会プログラム』 主催: 森の会、発行: 森の会事務所、朝日生命ホール、藤井凡大「四重奏曲」、長沢勝俊「萌春」、牧野由多可「花舞」、中島靖子「十七絃のための協奏的即興曲」、入野義朗「二つのファンタジー」地歌「吾妻獅子」pp. 2 ~ 7
- * 2000.09.22 曲目解説 『現代 [箏の音楽の流れ] そのV プログラム』 監修: 長廣比登志、主宰: 菊地梯子・白根きぬ子、発行: 現代 [箏の音楽の流れ] 事務局、すみだトリフォニー小ホール、藤井凡大「三重奏曲」、間宮芳生「四重奏曲」、牧野由多可「十七絃独奏による主題と変容」風、菅野浩和「邦楽器によるモノオペラ [安達ヶ原の鬼女]」p. 3
- * 2000.12.23 「20世紀に生まれた日本音楽」p. 1、曲目解説: 唯是震一「尺八と箏のための協奏曲第3番」、三木稔「三本の尺八のためのソネット」、長沢勝俊「三味線協奏曲」、三木稔「華やぎ」、舩川利夫「複協奏曲」『三橋貴風のおしゃべりコンサート Part 3 プログラム』 発行: 財団法人横浜市文化財団、横浜栄区民センター
- 企画・演出・口述活動
- * 2000.09.22 『現代 [箏の音楽の流れ] そのV』 すみだトリフォニー小ホール 監修・演出
調査・取材活動
- * 2000.08.09 浜松市楽器博物館の特別展示「日本の楽器」取材。学芸員と意見交換
- * 田邊秀雄氏所蔵の伝統音楽および民族音楽資料調査・取材、同氏宅(東京目白)
- * 2000.10.22 所長対談オーディオネット、(東京) 日本出版クラブ協会
対外活動
- * 通年 日本工学院八王子専門学校講師「日本芸能史」
- * 芸術文化振興基金運営委員会専門委員
- * 2000.11.08 芸術文化振興基金運営委員会第1回伝統芸能専門委員会、芸術文化

振興基金

- * 2000.11.29 芸術文化振興基金運営委員会第1回音楽専門委員会、芸術文化振興基金
 - * 所属学会: 芸能史研究会、民族芸術学会
- 田井 竜一
- 著作活動
- * 2000.09 研究発表口述筆記「地域音楽研究: オセアニアにおける最近の研究動向」『中部高等学術研究所共同研究会 諸民族の音文化(音楽)研究の課題と展望 新たな世紀を視座に入れつつ』、Chubu Institute for Advanced Studies、Studies Forum Series 7、春日井、中部高等学術研究所、pp. 28-32
 - * 2000.12.11 事典項目「ポップ・マーリィ」『スーパー・ニッポニカ2001 日本大百科全書+国語大辞典』、DVD-ROM/CD-ROM Windows/Macintosh 対応、東京、小学館
 - * 2000.04.30 報告「関西地区1999年度第4回(通算26回)研究例会: "Watery Histories," Philip Hayward (Macquarie University, Australia)」、JASPM NEWSLETTER (日本ポピュラー音楽学会) 第42号、pp. 12-13
 - * 2000.11.26 インタビュー記事「ソロモンとお囃子を追求し続ける」、森田恵子『ガレリアを風が吹きぬけ NHK 岡山放送局「きびきびワイド505」を訪れた人たち』岡山、吉備人出版、pp. 194-195
企画・演出・口述活動
 - * 2000.10.28 研究発表「ソロモン諸島の都市文化と音楽」、国立民族学博物館共同研究「メラネシアの都市と都市文化の人類学的研究」(研究代表者 吉岡政徳)、2000年度第2回研究会、国立民族学博物館第4演習室。
 - * 2000 ~ 2002年度ラジオ放送『応用音楽学』(主任・放送担当講師 山口修) 第5回「地域社会の音楽」ゲスト出演、放送大学人文科学系専門講義 45分番組。
調査・取材活動
 - * 2000.04 ~ 継続中 水口曳山囃子調査
 - * 2000.04.17 西暦2000年世界民族芸能祭演者招聘検討会議出席(大阪府堺市)

- * 2000.04.19 「水口曳山囃子保存活用事業」に係る調査委員会出席(滋賀県水口町)
- * 2000.05.03 日野祭り調査 2000.07.27 日野曳山囃子調査
- * 2000.06.14 住吉大社御田植神事見学
- * 2000.07.01 ~ 05 祇園祭り鶏鉾二階囃子調査
- * 2000.07.16 ~ 17 祇園祭り調査
- * 2000.07.29 ~ 30 植木神社祭礼調査(三重県大山田村)
- * 2000.08.04 西暦2000年世界民族芸能祭見学(大阪府堺市)
- * 2000.10.28 国立民族学博物館共同研究研究会出席
- * 2000.11.05 上野市天神祭記録作成事業成果発表会出席
- * 2000.11.11 日本音楽学会第51回全国大会出席(京都市立芸術大学)
- * 2000.11.12 第3回全国曳山囃子大会出席(滋賀県水口町)
- * 2000.11.19 西暦2000年世界民族芸能祭演者招聘検討会議出席
- * 2000.11.28 水口曳山囃子調査CD編集検討会議出席(センター)
- * 2000.12.16 国立民族学博物館共同研究研究会出席
- * 2000.12.19 ~ 20 水口曳山囃子CD編集(東京・東芝EMIスタジオ)
対外活動
- * 通年 くらしき作陽大学音楽学部非常勤講師
- * ~ 2000.08 (社)東洋音楽学会理事、機関誌編集委員
- * 東洋音楽学会第51回大会実行委員
- * 国立民族学博物館共同研究員
- * 西暦2000年世界民族芸能祭演者招聘検討会議委員(大阪府・堺市)
- * 上野市天神祭記録作成委員会委員(三重県上野市)
- * 「大山供養田植調査報告書」作成にかかる調査員(広島県東城町)
- * 「水口曳山囃子保存活用事業」に係る調査委員(滋賀県水口町)
- * 所属学会: 東洋音楽学会、日本オセアニア学会、日本ポピュラー音楽学会、日本音楽学会、日本民族学会、民族芸術学会、

International Council for Traditional Music, Society for Ethnomusicology

高橋 美都
著作活動

- * 2000.08.20 視聴覚資料紹介「柘植元一監修“重要無形文化財 雅楽 宮内庁式部職楽部”」『東洋音楽研究』65号、発行: 東洋音楽学会 pp. 119 ~ 121
- * 2000.10.20 コラム(trend)執筆「雅楽の今昔とむきあう」『小原流挿花』No 599、発行: 財団法人小原流 p. 33
企画・演出・口述活動
- * 2000.07.2 研究計画打ち合わせ「学術・教育素材のデジタルコンテンツ化と高等教育への活用にかんする研究」文部省メディア教育開発センター、学術・教育映像資料の統合型データベースシステムの研究開発に関わる共同研究実施、研究代表: 菊川健教官と担当川淵明美教官と面談 メディア教育開発センター研究棟(千葉 幕張)
- * 2000.08.23 研究発表「日本伝統音楽の楽器 データベース作成にむけて」文部省メディア教育開発センター研究棟 上記共同研究の実施
- * 2000.09.24 文部省科学研究費補助研究「日本伝統音楽文献データベース作成」研究代表: 上参郷祐康、東京芸術大学 データベース入力方式の提案
調査・取材活動
- * 芸能の調査見学
- 2000.05.05 奈良春日大社万葉植物園舞楽見学、笠置侃一・秋田真吾両氏と面談
- 2000.06.14 住吉大社お田植え神事
- 2000.07.16 松尾大社御田祭
- 2000.10.04 ~ 05 兵庫県上鴨川住吉神社の神事舞
- 2000.10.31 東京国立文化財研究所公開講座「舞う翁・語る翁」
- 2000.12.31 京都21(京都の火祭り・日本の音楽)
- * 写真の調査
- 2000.10.28 ~ 29 仙台市酒井信好氏宅(委託研究関係の舞楽写真)
- * 楽器の調査(東京国立文化財研究所 高桑いづみ氏の調査に同行、測定など担当)

- ・ 2000.10.26 春日若宮御神宝 笙と和琴の見学(宝物殿 秋田真吾氏解説)
 - ・ 2000.12.05 埼玉県入間市 武蔵野音楽大学人間キャンパス楽器博物館和琴
 - ・ 2000.12.06 東京都台東区入谷 小野照崎神社 小野貴嗣氏個人蔵和琴
 - ・ 2000.12.06 練馬区江古田 武蔵野音楽大学江古田キャンパス 楽器博物館和琴
 - ・ 2000.12.08 京都市考古資料館蔵 鳥羽離宮出土の和琴様の楽器
 - ・ 2000.12.13 千葉県佐倉市 国立歴史民俗博物館蔵 紀州徳川家旧蔵和琴
 - ・ 2000.12.20 滋賀県彦根市 彦根城博物館和琴
 - ・ 2000.12.26 東京都文京区本郷 小川楽器店にて、和琴製作修理についてのインタビュー
 - * 研修
 - ・ 2000.09.26 ~ 27 デジタルフロンティア京都、京都キャンパスプラザ
 - ・ 2000.10.09 デジタルライブラリー：文化資料研究の未来像、国際日本文化研究センター
 - ・ 2000.12.09 情報処理教育研究集会、文部省・京都大学共催、京都大学 対外活動
 - * 東洋音楽学会第51回大会実行委員
 - * 所属学会：東洋音楽学会、日本歌謡学会、中世歌謡研究会、芸能史研究会、楽劇学会、民族芸術学会、民俗芸能学会、民俗音楽学会、国際音楽資料情報協会
- スティーヴン・G・ネルソン
著作活動
- * 2000.07.31 ビデオ解説 GAGAKU: Performed by musicians and dancers of Kunaichō Shikibushoku Gakubu (Music Department of the Board of Ceremonies of the Imperial Household Agency, Tokyo) 『重要無形文化財 雅楽(宮内庁式部職楽部)』VHS ビデオカセット10巻組の解説 英文86 pp. (和文解説は遠藤徹による) 東京：下中記念財団
 - * 2000.12 GAGAKU 英語版監修・解説・ナレーション VHS ビデオカセット10巻組 岡田一男と共同制作 東京：下中記念財団
 - * 2000.12 監修・解説・ナレーション GAGAKU: An Important Intangible Cultural Property of Japan(『雅楽:日本の重要無形文化財』)VHS ビデオカセット1巻(58分。上記の10巻組のダイジェスト版) 岡田一男と共同制作 東京：株式会社東京シネマ新社 第44回日本紹介映画・ビデオコンクール(財団法人日本映画海外普及協会・社団法人映像文化製作者連盟主催)第二部門で優秀作品賞を受賞
 - * 2000.07 CDの英文解説 Gagaku and Beyond (『雅楽の地平線を越えて』)演奏：東京楽所 音楽監督：多忠輝 曲目：管絃《平調音取》《更衣》《越天楽残楽三返》《陪臚》 舞楽《陵王》(小乱声、陵王乱序、沙陀調音取、当曲、案摩乱声) 舞楽《八仙》(高麗小乱声、高麗乱声、小音取、当曲破、当曲急)《太食調音取》《長慶子》 Arizona, USA: Celestial Harmonies, 13179-2 40 pp.
 - * 2000.07 CDの英文解説 The Art of the Koto Volume One (『箏の芸術』第1巻)演奏：吉村七重、深海さとみ 曲目：伝八橋検校《六段》、伝八橋検校《乱》、峰崎勾当《残月》、光崎検校《五段砧》、二世吉沢検校《千鳥》 Arizona, USA: Celestial Harmonies, 13186-2 32 pp.
 - * 2000.12 CDの英文解説 Music for Koto (『箏の音楽』)演奏：木村玲子、田嶋直士 曲目：伝八橋検校《乱》、松村禎三《詩曲一番》、三木稔《ラブソディー》、三木稔《東から》、佐藤容子《雨の詩》 Arizona, USA: Celestial Harmonies, 13191-2 28 pp.
 - * 2000.06 CDの解説英訳 『現代の三絃 / 西潟昭子』演奏：西潟昭子、平沼有梨、田中悠美子 曲目：ルー・ハリソン《三絃のための「組曲」》Suite for Sangen、三枝成彰《Duo Ô87》、西村朗《時の蜜》Honey of Time、諸井誠《あん・ぷれさんず》en présence 和文解説：茂手木潔子、三枝成彰、平沼有梨、西村朗、諸井誠 東京 ビクター伝統文化振興財団 VZCG-164 (邦楽演奏家 Best Take) 14 pp.

- 口述活動
- * 研究発表
 - ・ 2000.10.16 *Ô*Melody and accompaniment relationships in gagaku songs of the twelfth century(「12世紀の雅楽歌曲における旋律と伴奏の関係」) Music Department, University of Sydney, Australia
 - ・ 2000.12.23 『『式法則用意条々』の「読式」- 講式の音楽構成法を中心に - 』 唱導研究会 京都 立命館大学末川記念館
 - * 講演
 - ・ 2000.04.21 特別講義「日本音楽史の研究法について」 東京 お茶の水女子大学教育学部
 - ・ 2000.12.10 現代邦楽研究所第6期公開講座「古典研究 段ものの魅力 第1回」 演奏：亀山香能、福永千恵子 東京現代邦楽研究所(TAスタジオ)
 - * 解説
 - ・ 2000.12.09 第6回山田流箏曲奏心会 東京 紀尾井ホール小ホール 曲目：《明石》《八重垣》《四段砧》《菊水》《「さらし」による合奏曲》
 - * 放送出演
 - ・ 2000.07.29 「彦根屏風」『国宝探訪』 NHK 教育テレビ 午後11時～11時30分
 - ・ 2000.10.28 The Music Show ABC (オーストラリア放送協会) ラジオ(全国放送) 午前10時～11時
 - * 座談会
 - ・ 2000.05.13 「日本人と日本音楽～国際人からの提言～」 現代邦楽研究所主催公開講座 東京 現代邦楽研究所TAスタジオ パネリスト：リチャード・エマート、クリストファー・逢盟・プレイズデル、スティーヴン・G・ネルソン 司会：森重行敏
 - * 演奏
 - ・ 2000.07.29 第4回東京雅楽会定期演奏会 第2部「高麗楽の今昔」で太鼓を担当 東京 奏楽堂
 - ・ 2000.09.24 「六輔・楽正・米朝の三ツ重ね」《笹の露》の箏を担当(三味線、佐々川静枝) 大阪 柏原市民文化会館リビエールホール
 - ・ 2000.11.10 「六輔・楽正・米朝の三ツ重ね」《笹の露》の箏を担当(三味線、菊原光治) 大阪 富田林市すばるホール 対外活動
 - * 通年 上野学園日本音楽資料室共同研究員
 - * 2000.09～ 宗教法人寶玉院附属日本伝統音楽研究所非常勤講師「日本音楽史」
 - * 日文研(国際日本文化研究センター)共同研究会・ルービン班「生きている劇としての能：謡曲の多角的研究」共同研究員
 - ・ 第1回 2000.07.24～25 討論のテーマ：《高砂》、《白鬚》、初番目物、《忠度》、《兼平》、二番目物
 - ・ 第2回 2000.09.25～26 討論のテーマ：《井筒》、《定家》、三番目物、《卒塔婆小町》、《松虫》、四番目物(都合により欠席)
 - ・ 第3回 2000.11.27～28 討論のテーマ：《邯鄲》、《三井寺》、四番目物、《山姥》、《鶴》、五番目物
 - * 東洋音楽学会第51回大会実行委員
 - * 所属学会：東洋音楽学会、日本歌謡学会、International Council for Traditional Music、Musicological Society of Australia、Association for Asian Studies

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター
概要 2000

センターのめざすもの

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指します。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に呈している日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものである、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を解明し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

センターの活動

1. 活動の柱

A 資料の収集・整理・保存

文献資料(図書、逐次刊行物、古文書、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む)、音響映像資料、楽器資料、絵画資料、データベースなどの電子資料の収集・整理・保存

B 日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究
専任研究者及び特別研究員による個人研究C 日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究
(1) 国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究
(2) センターが外部と共同して行う調査研究

D 委託研究

研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究

2. センターの拠点機能

国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

3. 活動成果の社会への提供

公開講座・セミナー等を開催したり、紀要・所報・資料集などの印刷メディア、さらには情報処理技術の研究開発成果を生かし、インターネットなどの電子メディアを介することにより、活動の成果を広く社会に提供します。

研究の対象

伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみすえる
明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承
古代

祭祀歌謡と芸能(楽器等の考古学的遺物を含む)

上代・中古

仏教音楽(声明等)

宮廷の儀礼・宴遊音楽(雅楽等)

中世

仏教芸能(琵琶、雑芸、尺八等)

武家社会の芸能(能・狂言等)

流行歌謡(今様、中世小歌等)

近世

外来音楽(切支丹音楽、琴楽、明清楽)

劇場音楽(義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等)

非劇場音楽(地歌等曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等)

流行歌謡(小唄、端唄等)

近代社会での伝統音楽の展開をみすえる
伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究

伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究

広い視野で生活の音楽をみすえる

民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族の音楽・芸能の研究

生活における音楽・芸能(わらべうた・民謡、祭礼音楽等の民俗芸能)の研究

専任研究員

(専門領域・現在の研究テーマ)

所長 廣瀬量平(日本音楽の今日的発展)

「縄文文化に由来する石笛とそれに関わる音楽と祭祀について」

「音楽創造の基盤としての日本伝統音楽」
教授 久保田敏子(日本音楽史学)

「当道職屋敷敷止後の三曲界研究」
「地歌・箏曲の作品研究」
教授 長廣比登志(現代邦楽論)
「現代邦楽の歴史的考察」
「現代邦楽放送記録目録の作成」
助教授 田井竜一(民族音楽学・日本芸能論)
「山車祭囃子の比較研究」
「囃し田の研究」
助教授 高橋美都(芸能史・日本音楽情報論)
「舞楽の比較研究」
「日本伝統楽器のデータベース作成」
助教授 スティーヴン・G・ネルソン(日本音楽史学[古代~近世])
『順次往生講式』の総合研究
「初期の講式の音楽構成法について」
事務室
事務長 今井 洋 担当係長 野村征理代 係員 後藤千香代
司書・研究補助員
司書 井口はる菜
研究補助員 伊藤志野 今井敏行 四宮 豊 特別研究員
井澤壽治(上方活性化研究会会長)「上方座敷歌の研究」
上杉紅童(高崎芸術短期大学客員教授)「日本古代の石笛および土笛の音響的・楽器学的研究」
尾関義江(奈良教育大学非常勤講師)「学校における邦楽教育方法論の研究」
中原香苗(日本学術振興会特別研究員)「中世楽書と音楽説話に関する研究」
山田智恵子(京都市立芸術大学非常勤講師)「義太夫節の音楽学的研究」
共同研究・委託研究
共同研究
(研究代表者/共同研究員)
「邦楽歌詞研究 1 地歌・箏曲」
(久保田敏子/小野恭靖・佐々木聖佳・鈴木由喜子・永池健二・野川美穂子・真鍋昌弘・山根陸宏)
「山車囃子の諸相」
(田井竜一/青盛透・入江宣子・岩井正浩・植木行宣・垣東敏博・樋口昭・福原敏男・増田雄・米田実)
「琴・箏の系譜 楽器、文献と奏法」
(スティーヴン・G・ネルソン/青木洋志・磯水絵・遠藤徹・福島和夫・和田一久)

委託研究
「音楽図像学の基礎研究」 国立音楽大学 非常勤講師(音楽学) 勝村仁子
「舞楽関係映像の記録作成」 舞楽写真家 酒井信好
「三曲合奏における尺八の意義」 尺八研究家 森田柊山

施設

新研究棟(階構成・内容)

6階 センター所長室、事務室、センター会議室、資料室、資料管理室、個人研究室
7階 合同研究室(2)、楽器庫、貴重資料庫
8階 個人研究室(5)、研究員室(2)、視聴覚編集室、研修室(2)
(センター総面積 約1,500m²)

設立の経緯

平成3年6月 世界文化自由都市会議推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を提言する。
平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する。」と言及。
平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される。
平成8年10月 京都市が伝統音楽調査会(会長:廣瀬量平名誉教授)に、伝統音楽研究部門の調査を委託する。
平成8年12月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる。
平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費 予算措置
平成10年4月 施設建設費 予算措置
平成10年10月 施設建設着工(工期17ヶ月)
平成11年9月 日本伝統音楽研究センター設立準備室を設置する(室長:廣瀬量平名誉教授)
平成12年2月 新研究棟竣工
平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設
平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟完成披露式挙行

Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts
2000

The Research Centre for Japanese Traditional Music was founded at the Kyoto City University of Arts on April 1, 2000, with the aim of undertaking comprehensive research on traditional music and performing arts within the society and culture of Japan.

In the more than one hundred years since the Meiji Restoration of 1868, Japan has earnestly followed a path of modernization and Westernization, which has become even more pronounced in the fifty something years since the end of World War II. We have reached a time ripe for the reconsideration of Japan's traditional culture, and the development of new approaches to it. The founding of the Research Centre for Japanese Traditional Music at the Kyoto City University of Arts is of particular significance in view of the fact that Kyoto has long been the living centre of Japan's traditional culture.

Kyoto is rich in physical evidence of its traditional culture, what we may term a 'visual heritage'; with the establishment of this new body, however, the city authorities have demonstrated an attitude of respect towards its 'aural heritage'. As a new 'centre' for research on Japan's traditional music, the Research Centre aims to make a broad and significant contribution to the field of Japanese music, by means of joining the past and the present with a unique range of activities in research and creation within the wider perspective of Japan's traditional culture.

Activities of the Research Centre

Central activities

A. Collecting, ordering, and preserving research materials of relevance to the study of Japan's traditional music and performing arts:

Documentary materials (books, periodicals, old documentary sources, copied and non-printed materials including microfilm, etc.); audio-visual materials; instruments and related materials; pictorial materials; materials in electronic form, such as existing databases and the like

B. Individual research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Research by individual members of the full-time staff
- (2) Research on particular themes by scholars employed as part-time research fellows

C. Team research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Team research undertaken from an interdisciplinary and international perspective by research teams based at the Research Centre, formed for that purpose with the cooperation and participation of researchers and performers from both Japan and overseas
- (2) Surveys in collaboration with other bodies and/or individuals

D. Commissioned research on aspects of Japan's traditional music and performing arts:

Research commissioned from scholars outside of the Research Centre on their fields of speciality

The Research Centre as a 'centre' for research

A primary goal of the Research Centre is to share and exchange information and the results of research with researchers, other research establishments, and performers, not only within Japan but throughout the world.

Bringing the results of research to a wider audience

The results of research carried out at the Centre will be presented to the public in a wide variety of forms, including public lecture series, seminars, workshops, lecture-demonstrations and the like. They will also be published in the forms of a regular newsletter, an annual bulletin, and collections of research materials. The Centre also plans to take advantage of developments in the electronic media with the development of databases for use on the Internet.

Fields of Research

The research fields of the Research Centre encompass the past, present and future of Japan's

traditional music.

- (1) The development and transmission of music prior to the Meiji Restoration of 1868

Prehistoric times

Religious song and performing arts (including archaeological study of surviving examples of instruments, etc.)

Ancient times

Buddhist music (*shoomyoo*, etc.)

Ceremonial and entertainment music of the court (*gagaku*, etc.)

Medieval times

Buddhist performing arts (*biwa*-accompanied narrative, *zoogei*, *shakuhachi*, etc.)

Performing arts of the warrior class (*noo*, *kyoogen*, etc.)

Popular song (*imayoo*, medieval *kouta*, etc.)

Pre-modern times

Music from foreign sources (so-called ŌChristianŌ music, Chinese *qin* music in Japan, *minshingaku*)

Theatrical music (*gidayuu-bushi*, other types of *jooruri* including *tokiwazu-bushi*, etc., *nagauta*, *hayashi* music in *kabuki*, etc.)

Non-theatrical music (*jiuta sookyoku*, other *shamisen* genres, *biwa*-accompanied vocal genres, *shakuhachi*, etc.)

Popular song (*kouta*, *hauta*, etc.)

- (2) Developments in traditional music since the Meiji Restoration

The development of traditional music and its possibilities, including composition

The reception of traditional music and the place of traditional music in education

- (3) Music in daily life, in the broadest terms

Folk transmission and the music and performing arts of areas related to Japan and of its indigenous minorities

Music and the performing arts in daily life (childrenŌs song and folk song; folk performing arts including festival music)

Research Methods

Depending on the subject of research, a great variety of approaches are possible: philological, historiographical, sociological, folklorical, ethnological, archaeological, organological, etc. Field studies are also an important part of the Research CentreŌs responsibilities. Aesthetic and

theoretical studies covering single genres or combinations of genres are also to be undertaken, as is research on individual pieces of music, performance techniques, forms of musical transmission, the construction of music instruments, and so on. Every effort will be made to gain a dynamic understanding of the complexity of music making as a fundamental human activity.

Members of the Full-time Research Staff, their research fields and current research topics

Director: HIROSE Ryohei (Modernization of Japanese music) Stone flutes of the Jomon period and their relationship to ancient ceremony; JapanŌs traditional music as a source for creation

Professor: KUBOTA Satoko (Historiography of Japanese music) Research on the *sankyoku* music world after the abolition of the Toodoo Shokuyashiki; Research on works of the *jiuta* and *sookyoku* repertoires

Professor: NAGAIHI Hitoshi (Contemporary music for traditional instruments) Historical study of the genre of contemporary works for traditional instruments; Documentation and cataloguing of broadcasts of contemporary works for traditional instruments

Associate Professor: STEVEN G. NELSON (Historiography of Japanese music, ancient to pre-modern) Comprehensive research on the *Junshi oojoo kooshiki*; Research on the methods of musical construction employed in early performances of *kooshiki* texts

Associate Professor: TAI RYUICHI (Ethnomusicology; Japanese performing arts) Comparative research on *dashi-bayashi*, festival float music; Research on the *hayashida* folk music genre of the Chuugoku District

Associate Professor: TAKAHASHI Mito (History of the performing arts; Japanese music and information technology) Comparative research on central and peripheral *bugaku* dance traditions; Construction of a database on JapanŌs traditional music instruments

Administrative Secretariat

Director: IMAI Hiroshi; Chief: NOMURA Mariyo;
Clerical Staff: GOTOO Chikayo

Librarian and Research Assistants

Librarian: IGUCHI Haruna
Research Assistants: IMAI Toshiyuki, ITOO Shino,
SHINOMIYA Yutaka

Research Fellows, their affiliations and current research topics

IZAWA Toshiharu (President of the Study Group for Enlivening the Kamigata Region):
Research on the *zashiki* songs of the Kamigata region

NAKAHARA Kanae (Research Fellow, Japan Society for Promotion of Science): Research on music treatises and music tales of the medieval period

OZEKI Yoshie (Part-time Lecturer, Nara University of Education): Research on the methodology of education in Japanese music

UESUGI Koodoo (Visiting Professor, Takasaki Junior College of Arts): Acoustic and organological research on early stone and clay flutes

YAMADA Chieko (Part-time Lecturer, Kyoto City University of Arts): Musicological research on *gidayuu-bushi*

Team and Commissioned Research

Team Research Projects (Team leader; guest researchers)

- (1) Texts of Japanese vocal music 1: *Jiuta-sookyoku*
KUBOTA Satoko; MANABE Masahiro, NAGAIKE Kenji, NOGAWA Mihoko, ONO Mitsuyasu, SASAKI Mika, SUZUKI Yukiko, YAMANE Michihiro
- (2) Aspects of *dashi-bayashi*, festival float music
TAI Ryuichi; AOMORI Tooru, FUKUHARA Toshio, HIGUCHI Akira, IRIE Nobuko, IWAI Masahiro, KAKITOO Toshihiro, MASUDA Takeshi, UEKI Yukinobu, YONEDA Minoru
- (3) The lineage of the Japanese zithers: the instruments, documentary materials, and performance techniques
Steven G. NELSON; AOKI Hiroyuki, ENDOO

Tooru, FUKUSHIMA Kazuo, ISO Mizue, WADA Katsuhisa

Commissioned Research

Towards a methodology for a Japanese music iconography (KATSUMURA Jinko, part-time lecturer in musicology at Kunitachi College of Music)

Documentation of field photographs of regional *bugaku* traditions (SAKAI Nobuyoshi, *bugaku* photographer)

The role of the *shakuhachi* in the *sankyoku* ensemble (MORITA Shuuzan, researcher on the *shakuhachi*)

Facilities

The Research Centre for Japanese Traditional Music is situated on the 6th to 8th floors of the University's Shinkenkyuutoo (New Research Building), with a total area of approx. 1500m².

6th floor: Director's office, administration, committee meeting room, reference library, materials management room, individual office

7th floor: Seminar rooms (2), instrument storeroom, special collection

8th floor: Individual offices (5), fellows' rooms (2), audio-visual studio, training rooms (2)

History

1991 The need for a new Kyoto centre for research on Japan's traditional music expressed by HIROSE Ryohei at an international conference of the world's cities

1993 Expansion of the Kyoto City University of Arts proposed within the city's plans for its renewal

1996 Initial plans for the Research Centre and Doctoral Course within the graduate programme of the Faculty of Art tabled; preparatory committee for the Research Centre established

1997 Budget allocated for planning the new building and surveying the site

1998 Construction begun (completed early 2000)

2000 Commencement of activities (April); opening ceremony (December 2)

編集後記

センター設立以来、1年を迎える。やっと『所報』が創刊された。この小冊子は、所員と当センター関係者のための、学術情報的性格をもった広報誌である。「所報」は、「紀要」を補完しつつ、両者が連結したかたちで、センターの学術情報生産活動を支える。本誌は、所員および当センターに関する研究者たちが、知的生産活動の一端を知らせあい、批判しあう「広場」。そういう性格の雑誌でありたいと願っている。身近で日常的な事象のなかから問題点を見つけ、門外漢にもじゅうぶんわかるような語り口で語ってもらおうよう、執筆にはお願いしたい。

鮮度の高い学術情報を提供するには、最低年4回ぐらいは発行したいところだが、客観情勢はそれを許さない。あるいは緊要性を認めない。学術情報の速報性と時事性は、理科系でない我々も、心しなければならぬ。なにごともしまりはむずかしい。不行き届きをお許し願いたい。第2号の準備は、まもなく始まる。

編集委員 長廣 比登志
高橋 美都
スティーヴン・G・ネルソン

京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター 所報
2001年3月31日発行
編集・発行人 京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター
廣瀬 量平
〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6
電話 075-334-2240
FAX 075-334-2241
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp
印刷所 西湖堂印刷株式会社

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts
13-6 Ooe Kutsukakechoo, Nishikyooku
Kyoto, 610-1197, JAPAN
Tel +81-75-334-2240
Fax +81-75-334-2241
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp

